「学びの拠点」としての
博物館をめざして
（提言）

令和元年 10 月

仙台市社会教育委員の会議

目　　次

提言　「学びの拠点」としての博物館をめざして

****

はじめに－審議の経過について－仙台市博物館の利用状況 …… 1
Ⅰ　めざすべき仙台市の博物館像 …… 6
Ⅱ　博物館における学習の現状と課題・今後の方向と施策
　1　「学びの拠点」にふさわしい豊かな学習機会 …… 7
　（1）「学びの拠点」としての役割へ向けて …… 7
　（2）「学びの拠点」としての博物館の運営について …… 8
　2　学校，大学，市民とのネットワークによる魅力ある学習機会の提供 …… 9
　（1）博学連携による豊かな学習の提供に向けて …… 10
　（2）市民の参加の促進による学習の機会の開発 …… 11
　3　博物館の学習を支える資源，人材の確保と育成 …… 12
　（1）高い専門性をもつ職員の確保と育成 …… 12
　（2）ボランティアの育成と活動の活性化 …… 13
Ⅲ　仙台らしい博物館学習・交流の機会の整備と活用
　1　震災の記憶を分有する機会の整備・充実 …… 14
　2　青葉山の博物館ゾーンの整備と回遊活用 …… 15
おわりに …… 17

資料編

****

Ⅰ「『学びの拠点』としての博物館をめざして」に関するヒアリング調査報告書
　○人文科学系博物館部会 …… 21
　○自然科学系博物館部会 …… 40
Ⅱ　仙台市博物館来館者アンケート
　○調査概要 …… 55
　○単純集計結果 …… 56
Ⅲ　参考資料
　○仙台市社会教育委員名簿 …… 65
　○仙台市社会教育委員の会議　審議の経過 …… 66

提言：「学びの拠点」としての博物館をめざして

はじめに

生涯学習社会を実現する中で多様な学習機会がひらかれつつある。その中でも図書館と並んで博物館は国際的にも「学びの拠点」として整備が進んでいる施設の一つである。博物館での学習は，個人的な展示物の鑑賞から，直接展示物に触れ，操作することによる学習，個人的ばかりではなく，対話を通して共有する学習など，実に多様な可能性にひらかれている。

しかしながら，博物館を訪れ，より積極的に学習に参加する市民がいる一方，人生の中でまったく博物館での学習を経験することのない市民が多数存在することも確かである。こうした市民が博物館を利用する機会を得，本物に触れて驚く，感動する経験をもつことができれば，その市民たちが生涯にわたり博物館等の社会教育施設を利活用するきっかけとなるだろう。

社会教育委員の会議では，仙台市における博物館利用の現状と課題を明らかにしつつ，市民による利用をより豊かなものにすること，博物館を「学びの拠点」として市民同士が学び合い，交流を深めること，さらに，学習の成果を社会に還元することを目指して，以下，いくつかの提言をしたい。

＜博物館の概要と制度的分類＞

博物館は，資料収集・保存，調査研究，展示，教育普及といった活動を一体的に行う施設であり，実物資料を通じて人々の学習活動を支援する施設としての役割も果たしている。博物館は，歴史や科学博物館をはじめ，美術館，動物園，水族館なども含まれる。

種別	設置主体	設置要件	登録又は指定する機関
登録博物館 ※博物館法の規定により登録を受けた施設	地方公共団体、一般社団法人、一般財団法人、宗教法人等	○館長、学芸員必置 ○年間150日以上開館　等	都道府県教育委員会 指定都市教育委員会
博物館相当施設 ※博物館法に相当するとして指定された施設	制限なし	○学芸員に相当する職員必置 ○年間100日以上開館　等	都道府県教育委員会 指定都市教育委員会　等
博物館類似施設 ※法的根拠なし	制限なし	制限なし ※社会教育調査上は博物館相当施設と同程度の規模を持つ施設	
統計上把握していない「広義」博物館			

＜仙台市内の博物館・博物館類似施設等一覧＞

区分		仙台市
人文科学系	歴史系	◎仙台市博物館 ◎歴史博物館青葉城資料展示館 〇東北学院大学博物館 ・仙台市歴史民俗資料館 ・仙台市戦災復興記念館 ・瑞鳳殿資料館 ・東北学院大学東北文化研究所 ・仙台市富沢遺跡保存館 ・仙台文学館 ・仙台市縄文の森広場 ・仙台城見聞館 ・史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設
	美術系	◎宮城県美術館 〇福島美術館（平成 31 年３月 31 日休業予定） 〇芹沢銈介美術工芸館 ・秋保工芸の里 ・一心美術館 ・成瀬美術記念館 ・中本誠司現代美術館 ・せんだいメディアテーク
自然科学系	自然系	◎仙台市天文台 ◎カメイ美術館 ・東北大学総合学術博物館 ・仙台市太白山自然観察の森自然観察センター ・仙台市秋保ビジターセンター ・仙台市大倉ふるさとセンター ・青葉の森緑地青葉の森管理センター ・せんだい 3.11 メモリアル交流館 ・震災遺構仙台市立荒浜小学校
	理工系	◎仙台市科学館（スリーエム仙台市科学館） ・三居沢電気百年館 ・仙台市水道記念館 ・仙台市電保存館
動物園		〇仙台市八木山動物公園 （セルコホーム　ズーパラダイス八木山）
水族館		・仙台うみの杜水族館
植物園		・東北大学植物園 ・仙台市野草園 ・仙台市秋保大滝植物園

◎：登録博物館　〇：相当博物館　・：博物館類似施設（平成 31 年２月１日現在）

（平成 31 年度宮城県の生涯学習より）

審議の経過について

社会教育委員の会議の審議の経過は，以下のとおりである。

○　今期，社会教育委員の会議は平成 29 年 11 月～令和元年 10 月までの２年を任期として会議を進めてきた。平成 29 年 11 月の委嘱状の交付の後，実質的な議論が始められた。

○　平成 30 年２月の会議で事務局から「議論すべき生涯学習・社会教育の課題」について説明があり，これを受けて「今期会議のテーマ」について意見が交わされた。ここでは主に，２点のテーマをめぐり検討した。一つは，「地域創生と社会教育」であり，もう一つは「学びの拠点としての社会教育施設の可能性について」である。

○　平成 30 年２月の会議の議論の結果，後者である「学びの拠点としての社会教育施設の可能性について」にテーマを決定した。

○　平成 30 年６月の会議で，事務局から仙台市を中心とする博物館利用の現状と課題等について資料が提示され，大まかな焦点と，今後の検討スケジュールを確認した。

○　平成 30 年８月の会議には，事務局から仙台市や他政令指定都市の博物館の所管部局や，人口に対する博物館来館者数の状況などについて示されるとともに，提言項目，博物館への訪問調査に向けたヒアリング項目，博物館の来館者アンケート調査実施概要について検討した。来館者アンケート調査の調査項目については，11 月の会議でも検討を重ねている。

○　博物館の訪問調査を委員２つのグループで進めるとともに，翌平成 31 年１月５日～１月９日の日程で仙台市博物館において来館者アンケート調査を実施した。この結果の速報は２月の会議で報告され，検討。４月に２回目の調査を実施することとした。

○　平成 31 年４月の会議では，提言「学びの拠点としての博物館をめざして」素案骨子を検討し，骨子に沿って，グループに分かれてこれまでの調査と議論を踏まえて内容を書き加えた。また４月 11 日～４月 14 日の日程で，仙台市博物館において２回目の来館者アンケート調査を実施した。

○　分担執筆した内容について，令和元年６月及び８月の委員会で検討を加え，９月には執筆グループの代表が特別会をもち執筆内容整理をして提言案を用意した。その後委員長・副委員長による調整，関係部局への事実確認，10 月の最終会議を経て，ここに提言をまとめるものである。

仙台市博物館の利用状況

（資料編Ⅱ　仙台市博物館来館者アンケート　○単純集計結果【第二回】(60 ページ)参照）

① 仙台市博物館は，多様な世代の学習の場となっている

20 代～60 代の世代別の来館者の割合は，それぞれ 10%～20%となっている。

② 仙台市博物館来館者は，観光としての訪問の比率が高い

来館者は仙台市内だけでなく，東北地方，関東（東京を除く），東京，その他からの来館者の比率が 60%を越えている。

③ 来館者がよく訪れる仙台市内の博物館系施設は，「仙台市博物館」がもっとも多い

よく訪れる仙台市内の博物館系施設について「仙台市博物館」と回答した来館者は２割前後ともっとも高い比率である。続いて，「仙台市天文台」や「地底の森ミュージアム」が 6.6%となっている。

④ 仙台市博物館の訪問は「はじめて」という来館者が多い

約８割弱が「はじめて」仙台市博物館を訪問している一方，リピーターも２割ほど存在する。

⑤ 仙台市博物館は「一人で」よりも，家族や友人と訪れる場所である

おおよそ４割は「家族」とともに訪問し，「恋人・パートナー」や「友人」と合わせると６割以上が誰かと一緒に訪れている。

⑥ 仙台市博物館利用の理由は「歴史への関心」や「常設展・企画展」などの展示物の魅力である

「歴史に関心がある」人は 40%ほど，「常設展・企画展」など展示物の魅力を 10%ほどが挙げている。一方，「観光の一環」も 24%ほどと高い数値となっている。

⑦ 広報として，家族・友人の口コミや観光情報が大きな影響力をもっている。

「観光ガイドブックなど」が 38.7%，「家族・友人からの紹介」が 18.4%と大きな影響力をもつ。こうした要素をもつ SNS などの利用は今後の課題である。

⑧ 見学時間は 30 分～90 分までがほとんどである。

「60～90 分」が 45.8%，「30 分～60 分」が 28.3%と７割を越える比率である。コンパクトな時間での利用であり，この来館者たちの動線を誘導することが博物館のネットワークの課題となろう。

⑨ 常設展の利用が多く，満足度も比較的高い

常設展の利用は，他の展示や施設利用より高く，満足度も「満足」が 52.4%と高い数値である。「やや満足」の 36.3%を加えると，ほとんどの来館者が満足感を示している。

⑩ 解説ボランティアの利用は３割で，今後の利用希望も比較的高い

解説ボランティアによる展示解説を受けた人は 32.1%であり，およそ３人に１人の割合である。今後の希望では，「ぜひ頼みたい」が 26.9%であるが，「できれば」が 42.5%となっている。

⑪ 仙台市博物館に肯定的なイメージをもつ人が多い

仙台市博物館は，来館者たちにとってどのようなイメージを与えただろうか。まず，「知識を得られるところ」69.8%であり，「興味や関心を呼び起こすところ」50%でもある。そして，「楽しいところ」26.9%でもある。しかし，来館者同士の対話を通した学びを深めるためには，「声を出さずに静かにするところ」というイメージは変化が求められる。

⑫ 今後も機会があれば仙台市博物館を訪れたいと考えている人が少なくない

「ぜひ来たい」人は23.1%，「できれば」の67.9%を合わせるとほとんどの来館者たちがまた訪問したいと思っている。リピーターを増やすことは，家族・友人との訪問を増やすことに結びつくのであるから，重要な課題である。

⑬ 仙台城跡→瑞鳳殿→仙台市中心街という移動ルートがある

仙台市博物館を訪れる人たちは，前後して「仙台城跡」に53.3%，「瑞鳳殿」に39.6%と歴史遺産を訪問し，そして仙台市中心街へというルートを移動するようである。つまり，博物館訪問理由の数値以上に，観光資源として大きな役割を果たしていると考えられる。

まとめ

仙台市博物館を訪問する人々は，多様な世代にわたっていること，歴史について関心をもっている人々でもあることが確認できた。常設展など展示物の魅力が訪問の理由として大きいが，それは，少なくない来館者が観光の一環として訪問していることを意味している。つまり，観光資源としての視点から博物館の役割を再評価することが大切である。

しかしながら，博物館はあくまで教育施設である。来館者の興味や関心を考慮した展示の工夫が求められるが，その楽しみを通して仙台市の歴史や文化のすばらしさについて改めて学んでもらうことがとりわけ重要である。楽しさとともに，新たな発見，過去に続く現在の文化の独自性について，質の高い展示を通して光を当てることが求められよう。

Ⅰ　めざすべき仙台市の博物館像

「学びの拠点」としての役割

学習者が主体的に学ぼうとするとき，資史料を調べたり，専門家に相談したりする機会が必要になる。博物館には市民の「学びの拠点」としての役割を果たすことが期待される。

ここでいう「学びの拠点」とは，博物館が多様な世代の市民や観光などで仙台を訪れる人々に学びの場を提供する役割を果たすとともに，学芸員や職員の調査研究の成果や小学校等への出張講座の提供などアウトリーチを通して学びを広げる役割を果たす，学びの結節点であることを意味する。この結節点を通して，①学びと実践という知の循環をつくる，②過去と現在そして未来へと新たな文化を創造し世代を越えて継承していく役割が，博物館には期待される。

ホンモノの魅力で驚き，学習への関心を誘発する役割

ICT を利用した学習や情報収集の機会が広がっている。しかし，博物館が提供する本物の展示物には異なる質の魅力がある。本物に出会うときに感じる驚き，感動は学ぶことへの興味や関心を誘発するだろう。

人々の交流の拠点としての役割

県内外の学習者の交流から家族，世代間の交流まで，多彩な交流機会。障がい者，高齢者，子どもたちまでが利用できる環境の整備。すべての人々が博物館に集い，対話し，交流する。

地域づくりの拠点としての役割

仙台市，宮城県の歴史，自然，風土が培ってきた暮らしについて学び，未来の郷土の姿を共有する学習機会。市民参加の活動の機会をつくることにより，学習を通して地域をつくる力を養成する機会。

Ⅱ　博物館における学習の現状と課題・今後の方向と施策

１　「学びの拠点」にふさわしい豊かな学習機会

仙台市内の博物館の課題として，施設の老朽化・構造上の問題の他，予算不足，人手不足は各館共通である。その他，博物館の種類によって多様な現状と課題が存在する。

自然科学系博物館においては，各館とも市民の多様な学習の場として機能している。学校教育においては，スリーエム仙台市科学館，仙台市天文台とも理科教育に貢献している役割は大きい。ただ，交通面での不便さが否めない施設もあり，来館の障壁になっている。予算面で措置が追い付かず，展示物の更新が遅滞している事例もある。さらには，施設によって専門性を活かした仕事に充てられる時間に差がある。各博物館への訪問調査では，日本の学芸員は，高度な専門性が求められる一方で安定的・継続的な雇用環境にない場合が多いなどの課題についても言及された。

人文科学系博物館においては，時局や流行に併せての展示企画，館内・館外での講座を実施したりするなど，市民のニーズに応じる工夫がなされている。ボランティアや友の会など，支援者との連携による深みのある施設活用も特筆すべき成果である。それでも来館者及び支援者が退職後の高齢者等に偏りがちなため，参加意欲に応えきれない事例や来館者の多様性に欠けるなどの課題が生じやすい。

（1）「学びの拠点」としての役割へ向けて

「学びの拠点」として，博物館は来館者の好奇心を喚起し，さらにその好奇心を満たすような所蔵品展示，展示物を説明する取り組みが求められている。来館者の興味を誘発するような展示手法の工夫が必要だ。ボランティアによる解説活動は単に情報を提供するだけでなく，施設とのふれあいの場ともなり効果的だ。さらにはギャラリートークやワークショップなど参加型のプログラムを企画することで，学習者同士の交流を図る機会にもなる。

博物館が多様な人々にとっての「学びの拠点」となるためには，学習意欲の高い来館者だけではなく，観光目的や娯楽目的の来館者も体験講座やイベントなどに参加することによって学習に触れる機会を充実させることが有益である。人々の身近な生活から切り離された博物館ではなく，展示物や企画に遊びや体験を取り入れることで，来館者が博物館での学習を身近に感じられるような工夫が必要である。

何度も博物館を訪れる人々が多くいる一方で，近隣に居住しながらも滅多に訪れることのない市民も多い。博物館に足を運んだことがない市民や観光客も気軽に立ち寄れるような仕組みやアピールが必要になる。歴史，文学，科学，天文，震災防災，いずれの分野でも，博物館が高度で専門的な学習の場というイメージだけになってしまうと，市民の足を遠のかせてしまう面もある。親しみやすい題材や参加しやすいイベント，ワークショップを開催し，新たな層の来館を促したい。

「学びの拠点」として十全な役割を果たすためには，人々に来館を促すだけではなく，

アウトリーチも重要となる。例えば，歴史という切り口から，近年流行りの街あるきを関連づけることで可能性が広がると考えられる。

太陽の通り道をたどるワークショップの様子

（仙台市天文台）

（２）「学びの拠点」としての博物館の運営について

博物館が「学びの拠点」として機能する上では，市民ボランティアが参加する機会，範囲を広げていく必要が見受けられる。本物の魅力による驚きや感動を提供し，学習への関心を誘発するためには，展示解説の充実も求められる。解説ボランティアには一定の知識やスキルが要求される面があるが，ボランティアにどこまで専門的な知識・スキルを求めるべきかは難しい問題である。来館者の関心や知識によってボランティアに必要な知識は変わってくる。また，来館者が外国人の場合には資料についての知識だけではなく，外国語のスキルも必要になってくる。高度な専門性は学芸員をはじめとした職員がしっかりと担うことで，予め高度な専門性を持たなくてもボランティアとして関与できるポジションの新設を検討してもよいだろう。学芸員などの専門職が当たっている調査研究に市民研究員も参画できる制度ができると，学習への関心をより誘発できるものと思われる。

広報についても，現代の生活環境の変化や技術の進展に即してさまざまな工夫が求められる。新たな世代に向けた呼び込みとして，既存の紙媒体だけではなく，SNS を利用した情報発信を進めていく必要がある。博物館の目的や所蔵品により想定する来館年齢層は変わるが，既存来館世代以外の年齢層にもアプローチできるよう多様な発信媒体の利用を検討したい。また，博物館からの発信だけではなく，SNS に見られるような来館者からの情報発信を促す取り組みにも力を入れたい。

来館者の偏りについては，各家庭や世代間で博物館に対する意識が異なることも要因として挙げられる。仙台市では「東北文化の日」[1] などの取り組みとして博物館の無料開放を

[1] 毎年 10 月の最終土曜日とその翌日の日曜日を「東北文化の日」と定め，この日から約１カ月間，ミュージアム施設の無料開放や関連事業などを実施。主催は「東北文化の日」推進委員会（青森県，岩手県，宮城県，秋田県，山形県，福島県，仙台市）（事務局：宮城県環境生活部消費生活・文化課）。

実施しており，このような取り組みは普段博物館を利用するという意識が少ない人々の来館を促すきっかけとなるだろう。博物館に対する意識とそれによる利用格差解消に向けては，先に述べた発信力の強化に絡め，気軽に来館することができる取り組みの周知促進も図りたい。

さらに仙台市では，海外からの観光客の誘客を目的として，インバウンドの推進を行っており，外国人に対応した対策も急務である。

仙台文学館，仙台市天文台と震災遺構仙台市立荒浜小学校は，交通面での不便さが否めない。公共交通機関の便が少なく，自動車での来館が多くなる。障がい者対応も含めて，立地や施設設備による利用格差の解消に向けた取り組みが望まれる。また，郊外に位置する博物館は場所が分かりにくくなりがちなので，スムーズに来館できるような案内表示も検討したい。

２　学校，大学，市民とのネットワークによる魅力ある学習機会の提供

学校教育における博物館利用については，授業カリキュラムに関連して体験授業などが実施される仙台市歴史民俗資料館，仙台市天文台，スリーエム仙台市科学館は小中学校の団体来館者が多い。一方，児童生徒や教員向けのプログラムを企画するなど教育現場との連携にも力を注いでいるが，授業カリキュラムとの関連付けが難しい仙台市博物館や仙台文学館は施策に苦慮している。また交通面での不便さが否めない施設は，学校教育での利用が一層難しくなる。

大学や他の社会教育施設等との連携としては，自然科学系博物館の大学研究室や公的図書館との協働による各種講座や，仙台市嘱託社会教育主事研究協議会[2]と市民センター共催の博物館を活用した企画などの実施が見受けられる。しかし大学生の博物館利用については，例えば大学等を対象とした会員制度であるキャンパスメンバーズの制度があるものの，加盟大学等の全学生数に対する来館学生数は少ないという。

また，多くの施設が「友の会」などの名称で，会員の入館料が減額となる制度を設け，このような会のメンバーが自主的に学習サークルを結成するなどの例が見られる。各館で活躍するボランティアもそれぞれの館において学習や交流をしている。その他市民との共同企画の例としては，せんだい 3.11 メモリアル交流館で市民との協働事業を実施しており，市民団体からの企画持込は増加しているという。しかしながら，ボランティアや自主的サークルには高齢者が多く，関わる世代が限られ，参加者が固定する傾向がある。さらに多くの施設が財政課題や人手不足に直面しており，自主的学習サークルへの支援は十分とは

---

[2]　仙台市では，社会教育主事の資格を有する市立学校の教員が，学校教育に従事しながら，社会教育の視点を生かして地域の教育力の向上など，学校と地域を結ぶさまざまな活動を行うことを促すため，教育委員会として昭和 46 年度から嘱託社会教育主事を委嘱。嘱託社会教育主事研究協議会は同主事で構成される制度開始から活動している団体であり，協議会内には指導者養成部，広報部，研修部，地域連携部の４つの専門部と五区事業部が置かれている。

いえない。

さらに企業との連携としては，スリーエム仙台市科学館がロボットフェスティバルなどの共催事業を行っているが，人文科学系博物館では企業との連携はあまり見受けられない。

以上のように，仙台市内の博物館は，学校，大学，市民とある程度のネットワークを持ち，それぞれのニーズに合わせた利用や連携がなされているものの，財政課題や人手不足もあり，継続的な利用に結びつくような学習機会の提供には至っていないのが現状である。よって今後は，以上の課題を解消すべく，学校，大学，市民とのネットワークにより魅力ある学習機会を提供することが望まれる。

（1）博学連携による豊かな学習の提供に向けて

まず，博学連携の充実を図ることが必要であるが，小中学校の来館利用については，授業時数の確保や交通手段等を考えると，現段階での大幅な増加は難しい。そのような中でいかに博物館の資源を学校教育に活用し，より質の高い学習に結びつけるかを模索し，出前授業や教員向けのミュージアムセミナー等を開催して利用促進を図っている館もある。出前授業は，児童生徒が博物館を身近に感じ，興味をもつ第一歩となることが期待できるし，ミュージアムセミナーは教員が博物館利用のメリットを知り，カリキュラム作成に生かすことによって，学習の質が向上することが期待できる。この出前授業や教員向けミュージアムセミナーは教員だけでなく，教員養成大学の学生にとっても参考になると思われる。しかし職員の人手不足という課題を抱え，思うように学校との連携を進めることが難しいという館も見られる。

このような状況下においては，「仙台・宮城ミュージアムアライアンス（ＳＭＭＡ）[3]」（詳細については後述）を中心とする等，包括的に連携を進めていくことが必要になると考える。学校教育での利用において立地や交通手段が課題となっている場合は，校外学習等で一つの博物館を見学する際に，関連する内容の博物館や近隣の博物館を見学できるような教科横断的なプログラムがあれば，利用の促進につながることが期待できる。博物館同士の連携により，各博物館がもつ資源の共有が図られることで，学校教育と結びつける活用アイデアや可能性が広がるのではないか。

また，大学，関連機関との共同企画の実施が望まれるが，現状では，博物館の学習資源について伝えることを目的としたイベントがいくつか開催されており，仙台市天文台では，大学との共同企画も行われている。仙台市嘱託社会教育主事研究協議会でも，市民センターと共催で，仙台市科学館や仙台市博物館を活用した企画を実施し，博学連携を強化しようとする取り組みがなされている。さらに博物館としては，大学生にも一層博物館を利用してもらいたいと考えており，アルバイトやボランティアとして関わっている事例もある

---

[3] 平成 21 年に設立された仙台・宮城地域の博物館や科学館など 17 館（令和元年 10 月現在）による共同事業体。各館がもつ知識やノウハウを集積し，ウェブサイト「見験楽学」での情報発信や複数館のコラボレーションによる展示・イベントなどを展開することで，ミュージアムの新しい魅力を地域に届けている。

ことから，運営面でも力になってほしいと望んでいる。

連携先や連携による可能性は多数見られるが，人手不足により余力がないと実行出来ないという現状がある中では，博物館と大学，関連機関の双方がそれぞれの特質を発揮しながら，連携・協力体制をつくることが重要なポイントである。

学校による博物館を利用した校外学習の様子
（仙台市博物館）

仙台・宮城ミュージアムアライアンス（ＳＭＭＡ）
による学芸員同行バスツアーの様子

（２）市民の参加の促進による学習の機会の開発

まず，自主的学習サークルの学習支援であるが，幅広い年代層が友の会等の自主的学習サークルに参加しやすい体制を作ったうえで広報活動を行う必要がある。現在，中心メンバーが高齢化かつ固定化しており，役員や会員の後継者の確保が課題となっていることからも，各博物館がそれぞれの魅力を発信し，特に若年層をメンバーへと誘っていくことが有効と思われる。その意味では， NPO 等の中間支援団体や在仙大学とのネットワーキングも重要である。また，財政が厳しいことが人手不足を招き，その育成を阻んでいることもあり，財政面に関する情報提供などの支援も必要であろう。団体・サークルが市民ベースで組織されている場合には，独自の資金調達（クラウドファンディングなど，新たな寄付の仕組みの活用）について検討することも有益かもしれない。しかしながら，それが難しい場合は，学習会時の場所の提供，ホームページでのメンバー募集といった支援を積極的に行うなどの工夫が求められる。

次に，現状あまり見られない企業と連携した共同企画の開発についてである。まずは博物館のニーズと地元の企業（例えば，IT 企業）のシーズを可視化するため，両者が参加できるテーブルを，半年に１回のペースで設けてはどうだろうか。ウェブ機能の拡充，VR（仮想現実）・AR（拡張現実）技術の導入など，博物館インフラのアップデートについては，自然科学系博物館だけでなく，人文科学系博物館においても少なからずニーズがあると思われる。このような側面を入り口としながら，両者が共同企画を展開するための関係づくりを進めていく必要がある。

博物館を観光資源という視点でみた場合，近隣県や町村博物館との連携は不可欠である。

仙台・宮城地域の博物館では，ミュージアムの発信力を高め，多面的な学習の機会を創出するため，多様なミュージアム施設の共同事業体である「仙台・宮城ミュージアムアライアンス（ＳＭＭＡ）」がある。この事業では，情報発信や連携事業に取り組んでおり，仙台市内の複数の博物館や関連施設を周遊するイベントやバスツアーなどが行われ，一定の成果を上げている。しかしながら，広域連携事業として全国の博物館が集う連携ワークショッププロジェクトに参加することはあるものの，隣県の博物館との定例的な連携事業は行われていない。観光資源として博物館を生かすのであれば，近隣県の博物館と協力して回遊ルートを開発することなどが必要であろう。その際，市内博物館の回遊性については仙台市交通局「一日乗車券」，近隣県・町村の博物館との回遊性については JR 東日本「小さな旅ホリデー・パス」など，各社が販売する割引乗車券とのタイアップも有効な手段となるように思われる。

３　博物館の学習を支える資源，人材の確保と育成

近年博物館は，資料を見るだけでなく，実際に触れるなどの体験を通して，学び，楽しむ場所としての要素を強く求められるようになっている。そのため，展示を中心とする教育活動だけでなく，ワークショップや鑑賞プログラムなど教育普及活動を多くの博物館が行っており，今後ますますその価値が重視されていくと見られる。そのことから，そうした博物館の学習を支える資源として，教育を意識した人材の確保や育成が必要である。

また，博物館における学習の可能性を広げる意味でも，市民ボランティアの存在は重要である。ボランティアは，その活動を通しての貢献のみならず，それぞれが熱心に勉強をし，自ら学ぶプロセスに意味や価値を見出していることから，その存在を通して，学ぶ者(来館者)に学ぶことの楽しさを実感させる役割を担っている。今現在各博物館で活躍する解説ボランティアを始めとする市民の活躍を丁寧にサポートすると共に，大学生などの若い世代へのアプローチなども積極的に行い，新たな人材の確保にも力を入れることが求められる。

（１）高い専門性をもつ職員の確保と育成

調査研究を主とする学芸員としての能力はもちろんのこと，専門的知識をもった上での教育的視点に立った企画力やコーディネート力，コミュニケーション能力が強く求められる。教育担当の専門知識をもった学芸員の採用の必要性が求められると共に，学芸員としての資格の有無に関わらず，館内での情報共有，博物館同士の連携，学校などの教育機関をはじめ地域との連携に能力を発揮できる職員の専属的部署での確保も有効ではないかと考える。

上記のようなことを考える上で，他機関との連携強化のための機会を積極的に設けることや，教育的アプローチ強化のための研修の充実が更に求められる。また，教育担当の部

署を独立させている宮城県美術館のスタイル（多くの場合は，学芸の部署の中にある）も，参考になるのではないだろうか。

（２）ボランティアの育成と活動の活性化

仙台市の各博物館で活動をする解説ボランティアやサポーターなどの充実は特筆すべきものがある（仙台市博物館・仙台市天文台・スリーエム仙台市科学館など，資料編Ⅰ参照）。

こうしたボランティアの活動の幅や存在を，館の中だけでなく，学校や地域にも広げることで，博物館が出来る活動の可能性が更に広がるのではないか。また，解説だけでなく，資料の整理保存などにも力を貸してもらうなど，ボランティアの参加領域の拡大は，生涯学習の視点からも有効ではないかと考える（仙台市歴史民俗資料館で検討中）。

展示解説ボランティア同士による
展示解説研修の様子（仙台市博物館）

博物館を訪れる外国人観光客
（仙台市博物館）

ボランティアのやりがいや，向上心，向学意識を満たせるような機会の充実も求められる。学芸員によるレクチャーや，ボランティアグループで自主学習をする際の専門家のサポートや資料の提供などの充実はもちろん，仙台市天文台でのボランティア５年継続毎に感謝状と記念品を贈るなどの心づかいなども参考にしたい。また，仙台文学館の「友の会」は，特典のサービスを受ける通常の友の会のスタイルを超え，運営を会員から選出された役員が行い，博物館側は事務局としてサポート行う市民主体の組織作りをしており，こちらも参考にしたい。

ボランティアの活動の活性化を考える上で外せないのが若者へのアプローチであるが，こちらは各博物館とも難しさを抱えているようである。若者は授業やサークル活動などで時間が取られ，通年でボランティアに関わることが難しいため，単発で関われるスタイルをつくる（スリーエム仙台市科学館で検討中）ことや，若者へアピールするワークショップの開催など，今後を視野に入れた，ファン層に厚みを持たせる工夫が必要と思われる。

Ⅲ　仙台らしい博物館学習・交流の機会の整備と活用

１　震災の記憶を分有する機会の整備・充実

震災遺構仙台市立荒浜小学校とせんだい 3.11 メモリアル交流館の震災メモリアル施設２館は，現時点で「所蔵品」がない。また防災の展示はしていないが，東部沿岸部の被災，文化継承に特化する役割はゆるぎない。

震災遺構仙台市立荒浜小学校は，建物（校舎）自体が津波の脅威を伝えている施設である。荒浜に特化した文化を伝えていくという趣旨がはっきりしており，震災遺構の存在意義を示している。県外からの来館者は全体の半数を超え，全国的に注目を集めているといえる。今後，時間をかけてさらに荒浜地区の歴史，文化を掘り下げて展示物を充実させ，後世への伝承につながることが期待される。この街の文化や暮らしを伝えていく側面性に加え，震災後に生まれた新たな文化を伝える施設となる可能性もあり得る。文化リテラシーを継承する施設として，新しい街になっていく過程も伝えてもらいたい。また学校現場での防災教育への活用に向けて，天文台学習と同様，市内学校に対する来館用貸し切りバス費用の確保も望まれる。

せんだい 3.11 メモリアル交流館は，メモリアルシアターとして，身体を使った催しも企画し，ダンス，演劇，詩の朗読など多様な展開を図ることを考えている。モデルケースのない中でのスタートであり，まだ完成型ではないということだが，風化させることなく後世に 3.11 を伝えて行くことにフォーカスしており，さらなる進化が期待できる。今後，進化と共に市民ボランティアの関わりも予想されるので，体制づくりも準備しなければならない。

上記２館の役割を永く維持するためにも，震災の記憶を伝え防災に特化した博物館の新設が望まれる。そこには仙台市天文台，スリーエム仙台市科学館で仙台市がこれまで培ってきた，科学面からの防災の知見も十分に生かされることが求められる。

また市内の各博物館で，それぞれの専門分野で考えられる，東日本大震災に関連する常設の展示を狭い範囲であっても設けてはどうか。更に，その情報を一覧できるようなパンフレットを作成するなどの試みで，観光客はもちろん，出張や学会などで仙台を訪れた人々へのプラスアルファでの働きかけが出来るのではないだろうか。他にも，防災観光事業の推進への博物館の寄与が検討できる。文化観光局との連携はもちろん，例えば，被災地を「道」でつなぐ取り組みをしている，「3.11 伝承ロード推進機構」や「みちのく潮風トレイル」など，さまざまなプロジェクトへの情報提供（連携）なども視野に入れての取り組みも考えられるのではないだろうか。

仙台市民は東日本大震災を経験し，被災からの復興という課題を共有してきた。震災後に市民活動が活発化している動きがある。そのような動きに対し，せんだい 3.11 メモリアル交流館では，年間を通じて市民の持ち込み企画に対する会場提供や後方支援をしている。震災後に新しい発想で運営している，市民力を生かした例といえる。このような問題解決に向けた独自の「市民力」を巻き込む取り組みは，生涯学習の面でも「仙台らしさ」を具

現することにつながるだろう。

震災遺構仙台市立荒浜小学校外観

展示室を見学する人々の様子

（せんだい 3.11 メモリアル交流館）

２　青葉山の博物館ゾーンの整備と回遊活用

青葉山エリアには，仙台市博物館をはじめ宮城県美術館，東北大学総合学術博物館などの博物館の他，仙台城跡，仙台国際センター，また広瀬川や竜の口渓谷，青葉の森緑地，東北大学植物園，西公園などの自然景観型施設が集積している。その他にも，仙台の特徴的な景観による魅力的なビューポイントや施設付属のカフェ・レストランが多数存在しており，仙台都心のオアシスエリアと捉えることもできよう。交通面では，仙台市都心からも近く，地下鉄東西線が利用でき，ダテバイクの活用も容易である。

エントランスとも言うべき位置にある仙台市博物館をゲートウェイと位置づけ，青葉山エリアに集積する仙台の歴史及び自然景観資源等を有機的に連携し，回遊できるような仕組みづくりが有効ではないかと考える。また青葉山エリアを生涯学習の拠点ゾーンとして整備し，施設と大学，市民団体などが連携をして，企画や広報などを行うことでソフト面での整備が進み，回遊する楽しみ，学ぶ楽しみを創出する方向性が考えられる。市民の生涯学習の推進はもちろん，観光客，特に外国人旅行者にとっても重要なコンテンツとなるのではないかと期待できる。

これからの時代には新しい博物館の活性化が求められており，特に市民社会の多様性に応える施設や組織の運用を実現するために，さまざまなハードルが存在するのは，前項まで述べてきた通りである。しかし一方で，もとより仙台市には市民主体で行政や企業を巻き込んで成り立ってきたイベントや施策が多く，「市民力」の発動が「仙台らしさ」とよく言われる。各博物館，施設を拠点として活動を行っている市民団体の視点やアイデアで，さまざまな角度からの連携を創出できるのではないだろうか。

例えば仙台市博物館で考えられる連携のアイデアを列挙してみる。仙台市国際センターとの連携による外国人旅行者向けコンテンツの整備，東北大学や宮城県美術館との連携によるアートや科学との融合イベントの企画，西公園の有効活用を考える団体との連携によ

る大昔から現代までの西公園の変遷，仙台城を知るための夏休みキッズスクールなど。

このような従来の枠組みを超えたブレイクスルーはむしろ市民が中心となった異業種団体・組織からの発想が必要であろう。市民の参加，NPO，企業や大学等との連携・協働によって，創造的でより魅力的な活動となることが期待できる。

当然ながら，企画の実現のためには，学芸員をはじめとする職員の知見と経験が不可欠であり，職員自身も楽しみながら息を長く挑戦していく姿勢があってこそである。また，国内外の参考となる事例を収集し，アドバイスを行ったりすることも重要である。さらに広報活動においても，市民発信型の SNS と博物館の公式情報が協力し合う従来の縦割りを超えたスタイルが有効であろう。

青葉山周辺と仙台市中心部

おわりに

現在進められているこれからのまちづくりに向けた新総合計画の策定作業では，仙台という都市に集積された質の高い知的資源が身近にあることを基盤に，市民が積極的に学ぶことをめざした「多様な学びの環境の充実」の取り組みについて，議論が深められている。

この点，これまでの提言で指摘してきたように，博物館は「学びの拠点」として仙台に暮らす市民たちの学習を支えるとともに，地域の文化遺産を後世に引き継ぎ，一人ひとりの教養を高め，それらを通した仙台市のアイデンティティ形成，未来をつくる新たな価値の創出，市民力の養成という役割を果たしうる可能性をもっている。

同時に，今期社会教育委員の会議が実施した調査から明らかなように，仙台市民の学習の場というだけでなく，観光資源として仙台市を訪れる外国人や観光客たちの学習と楽しみを提供している。つまり，仙台市の都市の魅力をつくる重要な要素となっていることが明らかとなった。

この提言をもとに，博物館が仙台市らしい文化芸術の保存・継承，創造の拠点としての役割を果たすだけでなく，地域の生涯学習活動，国際交流活動，ボランティア活動や観光等の拠点としても積極的に活用されること，地域住民の文化芸術活動やコミュニケーションを通じた絆づくりの場となること，人々の豊かな感性を育むとともに地域ブランドづくり（仙台市のアイデンティティ）と発信の場として，まちづくりの機能・役割を十分に発揮することを期待したい。

資　料　編

****

Ⅰ「『学びの拠点』としての博物館をめざして」に関するヒアリング調査報告書

○人文科学系博物館部会

1.　部会員

阿部哲也委員，小形美樹副委員長，男澤亨委員（部会長），齊藤康則委員，渡辺祥子委員，庄司弘美委員，高山典子委員

2.　訪問先施設　（それぞれの調査結果は 25 ページ以降。）

・仙台市博物館　平成 30 年 11 月 28 日（水）
・仙台市歴史民俗資料館　平成 30 年 12 月 6 日（木）
・宮城県美術館　平成 30 年 12 月 6 日（木）　※参考調査
・仙台文学館　平成 30 年 12 月 20 日（木）

3.　ヒアリング調査結果（総評）

（1）人文科学系博物館における学びの現状

■館内外で市民向けの講座を開催している

・一般向けには，館内・館外で講座や生涯学習推進などがあり，たくさんの方が利用している。（仙台市博物館（以下，博物館））
・アウトリーチ活動の一環として，市民センター等からの講演依頼，小中学校の出前授業の要請に応じている。（仙台市歴史民俗資料館（以下，歴史民俗資料館））

■展示物を案内するボランティアがいる

・「三の丸会」は，平成９年に仙台市教育委員会「生涯学習ボランティア支援」の一環として発足し，120 名程度で活動している。熱心で知識を深める意識の高い方が多く，博物館の支援者でもある。（博物館）
・ボランティア（歴史民俗資料館サポーター）が，自分で調査研究を行うなどのスペシャリストであるため，来館者にとってよい勉強になる。年４回実施されるサポーター会があり，会員内で講師を立てて学習会を実施している。（歴史民俗資料館）

■館を応援支援するサポーター，自主勉強グループがいる

・仙台市博物館友の会は，昭和 47 年に結成され，入会により特別展は各特別展ごと年２回まで観覧無料，３回目以降は半額，企画展・常設展は年間をとおして観覧無料となる。春秋の研修旅行や，講座を自主開催。現在 645 名。（博物館）
・「友の会」は，文学愛好者等の市民に呼びかけ結成した応援団的組織で，運営も会員から選出された役員が行っている。（仙台文学館（以下，文学館））
・実作をテーマとして開催しているゼミナールの受講生が，市民参加による短歌・俳句・

川柳の吟行会に参加するなど，参加者のステップアップが生じている。（文学館）
・実作講座の受講生が自主的にグループを作って，講座外で勉強会を行ったり，講師に指導を求めたりしている。（文学館）

■展示内容・企画を工夫している
・年間計画以外でも，その時々の話題や情勢に併せての展示を随時行っている。（文学館）
・日常的には来館しづらい児童生徒向けに，夏休みに集中して，館を活用してもらえるような企画を毎年行っている。（文学館）
・新たな世代に向けた呼び込みとして，企画展の中に写真撮影コーナーをつくり，来場者自らの発信を促すなど，SNS の情報発信等にも取り組み始めている。（文学を取り巻く環境が変化していく中で，守るべきことと変えていくことを両立した運営が必要であると認識）（文学館）

■子どもにも関心を抱いてもらえる取り組み
・子どものうちに一度来てもらうと，その後の社会教育の取り組みにつながる。（歴史民俗資料館）
・小学校低学年などには難しい展示が多いので，遊びを取り入れたワークショップなどを実施し，館に親しんでもらえるような工夫をしている。（文学館）

■そのほか
・小中学生には，学習のねらいに合わせて見学前後に展示解説をしたり体験活動をしたりする学習プログラムがあり，利用するケースが多いが，学校に出向く出前講座などの活用もできる。（博物館）
・小中学校の学校単位での来館時における入館料は，申請書の提出またはどこでもパスポートの使用などで減免扱いとしている。（博物館）
・教員向けに，セミナーや長い休みを利用しての研修など，授業や校外学習に役立つ情報を得る機会を提供している。（博物館）
・研究や勉強する場所だけではなく，ふらっと入れるコミュニティーの場になるよう，近隣の町内会等にも広報活動を行っている。（歴史民俗資料館）
・常時予約なしで使用でき，質問に対応できる専門スタッフが常駐している創作室（オープンアトリエ）を保有し，利用者がいつでも創りたいモノを創れ，アドバイスも受けられる体制をつくっている。（宮城県美術館（以下，県美術館））
・教育普及部署（教育普及班）が独立して設置され，館としての社会教育活動に従事している。（職員７名中，美術教員２名，学芸員４名）（県美術館）

（２）人文科学系博物館における学びの課題

■学校との連携について

・授業カリキュラムにて来館学習が位置づけされていないため，市内小中学生の利用が少ない。（博物館）

・教科担当制が壁となり，中学生の来館が少ない。担任が引率することには限界がある。（歴史民俗資料館）

・授業内容に館と連携できるような単元がなく，学校側で授業の時間に来館を組み入れることがなかなかできない。（文学館）

■解説ボランティアについて

・「三の丸会」は 120 名程度で活動しているが，年齢的には高齢者が多い。年度末に 10 名程度辞めるところに，20～30 名の応募があり抽選になることもある。興味関心が高く，意欲のある方が多く，抽選に漏れた方の活躍の場がほしいが，現状で対応は難しい。（博物館）

・ボランティアの方々も忙しいため時間が合わず，いつも同じ人に活動を頼んでしまい，負担感が危惧される。（歴史民俗資料館）

■施設の老朽化・構造上の問題

・高齢者が来館するには，エレベーターがないなど施設構造が課題となっている。（歴史民俗資料館）

・開館 20 年を経て，施設の老朽化による修繕も出てきているが，予算内で優先順位を考慮し実施しており，全てに対応することは難しい。（文学館）

■人員不足

・人材（職員）不足。専属的に地域や学校と話をする担当職員がいれば，もっと地域や学校に貢献できる。（歴史民俗資料館）

■そのほか

・開館から 20 年経って，高齢化のため当時から来ているリピーター層が薄くなっており，新しい来館者の確保が課題である。（文学館）

・限られた予算で企画展等を開催していかなければならないので，苦心している。（文学館）

（３）学びの拠点としてのあり方や今後の可能性拡大のために考えられる施策・取組み等

■来館者の確保，集客

・三の丸会などで活動している方は高齢者が多いが，同じように時間を使えるかどうか若い人にはややハードルが高い。しかし，歴史という切り口から，流行りの街あるきなど

博物館を取り巻く視野を広げることで，もっと可能性が広がるのではないだろうか。（博物館）
・高齢者だけではなく多くの世代が関われるような体制づくりや広報が必要。（歴史民俗資料館）
・館に足を運んだことのない市民や観光客に，もっと気軽に立ち寄れるようなしくみやアピールが必要。知的な香りのする思索の場，精神をリフレッシュする場，公園散策の休憩所など，文学に詳しくない人でも訪れやすい場所と位置づけて，初心者向けのイベントや展示をもっと大々的に行ってみても良いのではないか。（文学館）
・若い世代の来館も目指し，休前日の開館時間を延長した取組は参考になる。（県美術館）

■人員不足の解決
・所蔵品の量が多く整理が困難であるため，物理的にゆとりのあるスペースの早期確保が必要。ボランティアを拡充して整理や保存に当たってもらうこともできるのではないか。（歴史民俗資料館）

■部署を越えた連携，近隣施設との連携の必要性
・仙台市教育委員会では，所管の生涯学習施設を教員が訪問して施設活用等の研修会を行っているが，かつて対象外であった文学館（文化観光局管轄）も研修会の対象施設となり，そこからのつながりも生まれているとのこと。（文学館）
・関連テーマでの館を超えた企画展やイベントでの連携や，近隣施設での連携による広がりがもっと期待できるのではないか。（県美術館）

■周辺地域，立地を活かしたアプローチ
・博物館は，仙台城三の丸跡地に建ち，恵まれた自然環境の中に位置している。今もなお発掘調査が行われている場所や，仙台城に続く登城路，歴史ある場所を子どもたちにもっと知ってもらうためにも，さらなる教育活動の活発化を望みたい。（博物館）
・周辺の自然環境なども含めてのアプローチは，幼児から高齢者まで，世代を超えた関わりやつながりを期待出来る。（県美術館）

■その他
・建物の構造が原因で観覧できないことがないような方策が必要。（歴史民俗資料館）
・館の体制として学芸班（収集・調査・研究）と教育普及班（教育）を独立させていることによる効果が大きく現われていると感じる。（県美術館）

調査日：平成 30 年 11 月 28 日（水）
施設名：仙台市博物館
参加者：阿部委員，男澤委員，庄司委員
対応者：仙台市博物館　高橋主幹兼学芸普及室長，片寄学芸普及室指導主事，
　　三の丸会　伊藤会長

１　館の体制と主な活動
館長，副館長，主幹（１名）以下３つの部署がある。
庶務係（７名），学芸企画室（９名うち学芸員５名）…展企画・運営
学芸普及室（10 名うち学芸員１名）…市史活用，教育を含む利用活用　＊教育担当部署

＜博物館の役割＞
① 文化財，史料保存，展示，調査（学芸員を中心に）
② 生涯学習，学びの場
③ 観光，コンベンション機能

昭和 36 年に仙台城三の丸跡に開館した。伊達家から寄贈された（昭和 26 年）資料を保存・公開している。政宗が作った仙台，仙台藩の展示には特に力を入れている。伊澤家コレクションやゴトウコレクションなど市民からの寄贈は後を絶たない。現在の建物は昭和 61 年に建て替え。

＜展示の工夫＞
① 常設展
いつも同じものと思うかもしれないが，年４回（春の展示，夏の展示，秋の展示，冬の展示）の展示替えを行い，1,000 点ほどの収蔵品を出している。
② 展覧会（特別展，企画展の２つに分類される）
・特別展…収蔵品だけでなく全国の他の博物館からも展示資料を集める。
（１） 巡回展…他の博物館やマスコミとタイアップし複数地域で開催
（２） 自主企画展…自館で企画し，展示資料は他館からも借用し開催
・企画展…当該館のみの収蔵品，または県内から展示資料を借用する。常設展チケットで鑑賞できる。

子供や車いすの方でも見えやすいように目線低めに（150cm くらい）するが，特別展は後ろからでも見えるように常設展よりも少し高めに展示する場合がある。
常設展の音声ガイドは４ヶ国語に対応している。（日本語，英語，中国語，韓国語）

２　教育活動について

（１）　小中学生向けプログラム

学習のねらいに合わせて，見学前後に展示の解説を聞いたり，体験活動をする学習プログラムを準備している。来館し展示を見学してもらうケースが多いが，館職員が学校に出向く出前講座などの活用もできる。

学習プログラムには社会科系，図工・美術科系があり，またスタディシートの活用など，事前打ち合わせで各学校のねらいにあった学習ができるようにしている。平成29 年には伊達政宗についての子ども向けの冊子を発行し，市内の小学５，６年生に配布した。子どもたちが家で冊子を開いて家庭で楽しみ，それをきっかけに来館して欲しい。

※入館料は，申請書の提出またはどこでもパスポートの使用などで減免扱いとしている。

（２）教員向けプログラム

企画展や特別展に合わせて行う教職員を対象としたセミナー，また長い休みを利用して行われる研修も開催されている。博物館の資料を活用した博物館学習の具体例の紹介や学芸員による見どころ解説のあと自由観覧，資料にまつわるエピソードや歴史的な背景など，授業や校外学習に役立つ情報を得る機会となっている。

（３）一般向けプログラム

館内・館外で行われる講座，生涯学習推進などがある。

・しろ・まち講座（平成 29 年度は４回，延べ 769 名が参加）

・まちなか博物館（平成 29 年度は２回，延べ 325 名が参加）

生涯学習推進は，団体・機関からの依頼を受け学芸員等の館職員が講話を行うもので，依頼により館内・館外で行った。館外では市民センター，老壮大学からの依頼などがそれにあたる（平成 29 年度は 77 回，延べ 4,062 人が参加）。

また，館内の情報センターでの来館者の調べ事に対応している。

３　学習サークルや自主調査・研究活動グループの存在について

【仙台市博物館友の会】（昭和 47 年結成）

年会費は賛助会員 5,000 円，普通会員 3,000 円（学生会員 2,000 円）で，特別展については各特別展ごと年２回まで観覧無料，３回目以降は半額となり，企画展・常設展は年間をとおして観覧無料となる。春秋の研修旅行，講座を自主開催している。会員数 645 名（平成 29 年度）

４　館ボランティアについて

【三の丸会】平成９年仙台市教育委員会「生涯学習ボランティア支援」の一環として当時 60 名で発足。平成 30 年度会員数は 119 名。年度により増減があるが，概ね 120 名。

「活動班」（９～10 人の 12 班編成）に分かれ，２週間に一度活動している。年齢は 20～80 代だが，平均は 65 歳くらいで 60～70 代が多い。定年退職された方，仕事をされている方，歴史に興味のある方など様々で，人により知識の質量，ガイドに対する意識が違う。また，複数ボランティアを掛け持ちしている方も多くいる。活動は常設展の資料解説が主で，プレイミュージアムでの活動補助，館庭の案内などもする。また，ガイド活動の他に５つの部活（運営，研修，会報，英語，資料）いずれかに所属し活動している。

※運営部：会の運営に関する事務全般を担当。

研修部：会員の発表会，学習会，講演会，館外研修会を企画運営。

会報部：三の丸会報を編集，発行。

英語部：外国人に対して英語で解説するために勉強会を企画運営，英語ガイド実例集を作成。

資料部：観覧者からの質問を集めた「尋解集」を作成。古文書講読会を企画。

会員は年度毎の更新で５年まで。再応募可，最長 10 年で一度退会。１年休会後，また応募できる。また，年度末に 10 名程度辞めたところに 20～30 名応募があり，抽選になることもある。（不足して困ることはない。）

新規会員は２日間 10 講座のボランティア養成講座を受講し会員として登録となる。実際にガイドとして活動するには個人個人の勉強が必要で，活動日の休憩時間などを利用し会員同士で勉強会などもしている。会員は興味関心が高く，意欲のある方が多いので，抽選に漏れた方の活躍の場があればよいと思うが，今のところは難しい。

５　現在の館の運営や事業の課題（予算，施設，集客，事業活動，評価等）について

昭和 61 年の建て替えからも 30 年が経っており建物の大規模改修，リニューアルが必要で，博物館に特化したライトやミュージアムガラス等の設備にも，見た目以上に金額がかさむ。

展示は数年スパンで予定を組むが，大型の展覧会をどう入れ込んでいくのか。

来場者数は，展示の内容（人気の企画）により変わる。仙台市内の児童生徒数よりも仙台市外のほうが多い。

６　今後の博物館の役割・館の方向性について

もっと仙台市内の学校に利用してもらいたい。スリーエム仙台市科学館（市内中学校全校の２年生）や仙台市天文台（市内中学校全校の１年生）は授業カリキュラムにて来館による学習が位置付けられているが，仙台市博物館には必須活用機会は定められていない（平

成 29 年度利用状況は市内小学校の 36%，市内中学校においては 16%となっている。市内小学校 45 校/124 校，市内中学校 11 校/66 校)。博物館学習は政宗の育んだ，伊達な文化や郷土を知る上でも貴重な学習機会と考える。市営バスの貸し切りが無くなり学校では大変だと聞いているが，地下鉄東西線を利用するなどして市内小中学校の学習利用を推進していきたい。

PR では，新幹線内の小冊子「トランヴェール」，大人の休日倶楽部の広告が効果的だった。SNS は，ホームページ，Twitter。また，市民には市政だよりが効果的。今後も，PR は後手にならないようホームページの情報更新，Twitter，市政だよりなど利用者の興味関心に訴える情報，発信方法を検討し，いろいろな形で広報していきたい。

７　その他

なし

８　所感

仙台城三の丸跡に建つ仙台市博物館は，恵まれた自然の中に位置している。庭をぬけると登城路を経由して仙台城本丸跡に至るわけで，今現在も発掘調査が行われている仙台市の最も重要な史跡の一部でもある。この仙台の歴史と自然の景観をもっと子どもたちにも知ってもらうためにも，さらなる教育活動の活発化を望みたいと思った。友の会や三の丸会のメンバーは，知識を深める自己啓発が目的で活動しているだけでなく，博物館そのものの熱心な支援者でもある。年齢的には，高齢者が多く，若い方の参加が少ないのが現状である。活動を行うためには，広範かつ深い知識の学習が必要で，相当な時間の確保が必要なので，50 代以下が参加するのはハードルが高い。しかし，最近のまちあるきブームに象徴されるような博物館を取り巻く視野を広げていければ，来館者，関連活動への参加者，仙台城跡をはじめとする史跡への訪問者が格段に広がっていく可能性が存在するのではないだろうか。

また一方，市内小中学校の児童生徒が来館する機会を増やす工夫も重要である。この時期の来館で，郷土の歴史や博物館に興味を持てたかどうかが将来も来館するかを左右するからである。楽しかった振り返りや自主学習などを保護者に発表する機会があれば，次回家族での来館につながっていくのではないかと考える。

また，SNS の利用や，ＳＭＭＡ各館の交流など，今後連携やイベントも増えていく余地はあるのではないかと思う。

調査日：平成 30 年 12 月６日（木）
施設名：仙台市歴史民俗資料館
参加者：阿部哲也委員，小形美樹副委員長，男澤亨委員，齊藤康則委員
対応者：仙台市歴史民俗資料館　西嶋館長

■館内視察

ヒアリングに先立ち，１階ロビー，２階展示室，倉庫を視察させていただいた。

訪問日は，特別展「コメどころ仙台～コメの生産と消費の歴史～」が実施されており，小学３年生が１階ロビーで石臼の体験をし，学習室で行灯について学んでいた。また，２階にも関連展示があった。

２階の常設展示は，「仙台地方の農具と農家のくらし」，「仙台 町場のくらし」，「旧四連隊コーナー」，「体験学習室（昔の遊び体験コーナー）」，「被災地関連展示」である。訪問日は小学生が昔の遊びを実際に行い，歓声をあげていた。

資料館の資料は９割以上が寄贈とのことで，現在，約 89,000 点を所蔵しており，泉区根白石と宮城野区高砂にも倉庫があるとのことであった。倉庫内にはかなりの数の資料があり，整理や保管に苦労をされている様子が窺われた。

１　館の体制と主な活動

（１）組織・職員体制（教育担当職員）

職員は７名（館長１名，事務局長兼学芸室長１名，学芸員２名，庶務担当の事務主任１名，臨時職員２名）。週１～２回，アルバイトの大学生４名（民俗学等を専攻）が来ており，大きな戦力になっている。

来館者への説明は事務局長兼学芸室長と学芸員（主任及び主事）が担当。中学生の職場体験，障害者の就労体験などは館長が担当。

（２）事業内容（展示／収集・調査・研究／教育活動等）

企画展（中規模）は年２回，特別展（大規模）は年１回（図録を作成し，市内の小中学校をはじめとして全国に発送）。それに加えて，花見・七夕・正月・ひな祭りのような季節展示がある。３月には被災地に関連した展示（被災前後の写真など）を行っている。ゴールデンウィークには「おもしろ昔たいけん」，秋には「れきみん秋祭り」等のイベントも開催。

アウトリーチ活動の一環として，市民センター等からの講演依頼，小中学校の出前授業の要請に応えている。

（３）来館者数や属性等の変化

来館者は年間 30,000 人台で推移。小学３年生では昔の道具について勉強する単元があり，市内 124 校中 100～110 校が来館（市外からは 30 校前後。岩手・山形・福島が多い）。無料で入館できる豊齢カードもあり，高齢者の来館も見られる。高齢者施設の入居者の団体利用もあり，昔の道具などを見ると話題が弾む。20～40 歳代の来館は少ない。男女比はほぼ半々。

２　教育活動について

折しも小学生（３年生）が昔の道具についての勉強で来館。ロビー，学習室において，石臼，行灯などを体験中であった。「子どものうちに一度来てもらうと，その後の社会教育の取り組みにつながるし，今度は親を連れてきてくれるのではないか」とは，館長の弁。

（１）博物館の教育活動として留意していること

館内には「触ってはいけません」との指示が貼られているが，館長自身が説明する際は，館長立会いの下，手に取って道具に触らせることもある。実際に体験することは，子どもにとって強く印象に残るものであり，そこから，様々な問題意識が生まれると思っているからである。

（２）教育活動の課題

教科担当制が大きな壁となっているせいか，中学生の来館は少ない。学習指導要領には，社会教育施設で学ぶ旨，明記してあるが，担任が引率することには限界があるのだろう。その反面，３～５日間の職場体験では３～４校の中学生の来館が見られる。

介護施設の入所者にも，是非来てもらいたいと思っているが（道具を通して昔のことを回想できる），構造上，館内に，エレベーターを設置することができず，ますます高齢化社会を迎えるにあたって，一つの課題となっている。

３　学習サークルや自主調査・研究活動グループの存在について

特になし。

４　館ボランティアについて

（１）概要

来館者への解説やイベントの手伝いをしてもらう「歴史民俗資料館サポーター」は，館独自で市政だよりで募集等を行っている。「ボランティア養成講座」受講後，意向を確認してサポーターとして登録をしてもらう。現在の登録者は 23 名。５～６年前に制度ができ，現在５期目である。

初回の「ボランティア養成講座」の他は，育成の事業はない。70 歳前後の方が多い。パワーがあり，自分でも調査研究を行うなどのスペシャリストであり，お客様にとってよい勉強になり，また，感動を与えるので非常に助かっている。

（２）活動内容等

自主的活動はなく，館から活動内容を依頼する。イベントの手伝い，会場設営，チラシ配布，常時においては，お客様への解説，学校から小学生への解説を依頼されることもある。サポーターへ解説を希望する団体（学校など）の訪問スケジュールを提示し，都合が合う時に参加してもらっている。見るだけよりも話を聞いたほうが印象的で理解が深まるので来館者には好評である。また，団体の訪問スケジュールがない場合も，サポーターの都合で来館してもらえるようにお願いしている。これにより，ふらっと訪れたお客様にも対応できると考えるからである。

サポーター会は，年に４回実施され，サポーター内で講師を立てて学習会をしている。実際に参加するメンバーは 10 名前後だが，資料を作成してきて勉強会を開催している。

（３）ボランティアに関する課題

積極的に活動をしてもらいたいが，他の団体のサポーターやボランティアも掛け持ちしていたり，フルタイムで働いている人もいたりして，時間が合わない。そのため，いつも同じ人に頼んでしまい，負担感を感じさせているのではないかと危惧している。

５　現在の館の運営や事業の課題（予算，施設，集客，事業活動，評価等）について

職員の人手が足りず，積極的に活動の幅を広げることはできない。

外部からの要請に応じて対応していくので手一杯。

館自体が文化財であり，バリアフリーに対応するのは難しい。所蔵品の性質上，高齢者の関心が高いが，階段が急であり２階に上がれず帰る人もいる。建物が見る人にとって，選別や障害になっているとすれば，エレベーターを必要としている市民の方に申し訳ないと思う。

過去には，仙台市教育委員会が，エレベーターの設置を検討したことがあるが，建物の構造上，エレベーター設置は，難しいという結論に至った。

人材（職員）が不足している。学芸員が，要請に応じてアウトリーチを行っているが，理想としては，専属的に地域や学校と話をする担当職員がいれば，もっと地域や学校及び諸団体に貢献できるのではないかと思っている。待っているだけではなく地域に向けて発信し，気軽に入館できる資料館でありたいと考えている。

6　今後の博物館の役割・館の方向性について

社会教育施設は生涯学習の中心的な役割を果たすもので，生きがいづくりの中心。研究や勉強する場所（敷居が高い）だけではなく，ふらっと入れるようなコミュニティの場所にしたいので，近隣の町内会等にも広報活動を行っている。市の施設であり，税金で運営されているのであるから公共的であり，市民に親しまれ，もっと多くの人が利用したいと思っていただけるような資料館でありたいと常々思っている。

7　その他

特になし。

8　所感

・民俗という人々の生活に関する展示を扱っており，収蔵品を身近に感じる来館者が多いと思われる。とりわけ収蔵品を実際に使用していた高齢者は昔のことを懐かしんでいるようだ。また，来館していた小学生には今は目にする機会が少ない道具が新鮮に映り，実際に手に取り歓声を上げて楽しんでいた。人々の生活と地域に密着した博物館，展示物ではあるが，人手が足りず地域へ出向くことができなかったり，建物の構造上来館した高齢者が展示物を見ることができない場合があり，歯がゆく感じた。市民の安全性を確保するため厳格なエレベータ設置基準を担保しているのは理解できるが，来館しても建物の構造が原因で観覧できなかったということがないよう，引き続き方策を検討していただきたい。

・地域の歴史について触れることができるこのような施設の存在は貴重であると感じた。高齢者にとっては子どものころのことを回想できる場所であり，若者にとっては親や祖父母世代の暮らしや当時の社会情勢などについても学ぶことのできる場所である。マンパワーが不足している中，ボランティアによる来館者の学びの支援は意義深く重要であると感じた。ただ，どうしても高齢者が中心となるので，多くの世代が何らかの形で関われるような体制づくりや広報が必要であり，そうすることによって世代間交流が生まれ，学びが一層発展すると思われる。

・昔の仙台のくらしや歴史の一端の実物を目にし体験できるという博物館で，高齢者にも子どもにも人気があり，印象深い時間を過ごせる，心に残る施設であると改めて認識した。課題のひとつは，現在保有する収蔵物の量が多く，整理が困難なことである。また，現在の展示物は昭和30年代以前が中心のようだが，当該館の本質的な目的を考えていくと，いずれは昭和40年代，昭和50年代と展示物の時代を広げていくことも考える時期がくるのではないだろうか。例えば，使用しなくなった学校校舎を収蔵に利用するなど，物理的にゆとりのあるスペースを早期に確保すべきだと思う。現在のままでは，収蔵物の整理・劣化対応も難しいようだ。場所の確保ができれば，ボランティアを拡充して整理や保存に当たってもらうことも考えられるのではないだろうか。

・PFI 方式による榴岡公園の再整備（平成 32 年（2020 年）春頃）に向けて，歴史民俗資料館としても何らかの取り組みができると，来館者の増加（とりわけ来館の少ない 20～40 歳代の増加）につながるのではないか。職員不足により日々の運営に追われる中，とりわけ学芸員の教育・研修機会はどのように確保されているか。「学びの拠点」であり続けるには，職員（学芸員）自身の学ぶ機会を保障することも重要。予算制約によりスペースの早期確保が難しい状況の中，収蔵品をアウトリーチ型で「見せる」仕掛けも必要ではないか。メディアテーク，市民センター（拠点館）をはじめ，仙台市内にはいくつもスペースがある。そのことが寄贈者への応答責任ともなる。

調査日：平成 30 年 12 月 6 日（木）
施設名：宮城県美術館
参加者：庄司弘美委員，渡辺祥子委員　（同席者：佐藤智子委員）
対応者：宮城県美術館　菅原副館長兼管理部長，羽賀教育普及部長，菅原副参事兼次長

＜館の体制＞

館長
副館長
管理部長（副館長兼務）―総務管理班
学芸部長―学芸班
教育普及部長―教育普及班
　＜31 人体制で管理・運営にあたる＞

・特徴としては，教育普及部署＜教育普及班＞を独立して設置していることがあげられる（通常は学芸の部署の中に教育担当者がいるケースが多い）。これは開館時からの体制である。教育普及班７名の中には美術教員２名，学芸員４名がおり，学校団体向け常設展（コレクション）のギャラリートークなどは教育普及班の学芸員が担当。特集及び特別展の展示解説などは学芸班のが担当。

＜教育活動について＞
・常時予約無しで使用でき，質問に対応できる専門スタッフが常駐している創作室（オープンアトリエ）を保有しているところが特徴（教育分野や生涯学習への積極的なアプローチで，国内の県立美術館の中でも先進的な活動をしていると認識されている。美術教室ではなく，利用者が創りたいモノを創れる，何をしたら良いかを，専門知識を持ったスタッフがサポートする体制が取られている。）。
・幅広い層をターゲットにしたワークショップを開催。幼い頃から美術に触れる機会を積極的に提供するなど，将来を見通した取り組みを行う（一般成人を対象にしたプログラムはもちろん，幼児も参加できる美術館探検，11 歳以上を対象にした美術探検，18 歳以上が対象の実技ワークショップ，親子で参加できるキッズプログラムなど）。
・その他，講演会・美術講座・展示解説・公演会・アウトリーチなどを実施。

＜所感＞
・昨年ディズニー展を開催した際の取り組みとして，近隣の東北大学生など若い世代の来館も目指し，休前日の開館時間を延長したとの事。企画内容や立地条件，時期などもあると思うが，こうした柔軟な発想と取り組みで若い世代にもアプローチしたことは大変参考になると感じた。

・学びの拠点としての館の役割を考える上で，体制として学芸班（収集・調査・研究）と教育普及班（教育）を独立させていることによる効果が大きく現われていると感じる（教育普及班スタッフが，『美術なんでも相談』と書かれたネームプレートを胸に下げ館内を歩く機会もあるとのこと。「いつでもどんな時でも，美術館スタッフを見たら声をかけて質問してね！」という姿勢が館内に浸透しているのは大変に望ましいことであると感じた。）。
・予約無しでいつでも使用できる創作室（オープンアトリエ）に専門家が常駐し，利用者の創作のサポートをする体制が整い，常に外に開かれている体制が充実していることは大変に好ましく感じた。
・創作の要素が強い美術という特性から，利用者の好奇心を刺激し，自ら学びたいとの意欲につなげていくアプローチや，幼児期から美術館や美術の存在に遊び感覚で触れられる取り組みは，生涯学習を長い時間の流れの中で捉えるためには学ぶべき要素が多い。
・庭に出ると，広瀬川が一望でき，川風を感じ，樹木や池など色々な楽しみ方ができる。展示を鑑賞する以外でも，カフェやレストラン，トイレだけの利用でも良き環境に触れられるメリットがあり（近隣の保育所の園児たちが庭に散策に来ることもあるそう），公共施設の中でも気軽に，そして充実した利用ができる施設だと感じる。
・地下鉄東西線の開業を受け，国際センター駅を拠点にしたエリアの連携（仙台市博物館や仙台城跡，東北大学植物園や地下鉄国際センター駅なども含めた）による来場者の広がりも更に期待したい。

調査日：平成 30 年 12 月 20 日（木）
施設名：仙台文学館
参加者：男澤亨委員，庄司弘美委員，渡辺祥子委員
対応者：仙台文学館　赤間事務長兼学芸室長，庄司学芸室主任
　　伊藤職員，友の会会員（元役員）佐野氏

１　館の体制と主な活動

・館内の概要

２階の講習室は 100 名が入り，一般にも貸し出している。情報コーナーは仙台ゆかりの文学者の書籍や東北大学所蔵の漱石文庫のマイクロフィルムの閲覧が可能。交流コーナーは椅子とテーブルが配置され，飲食も含め自由に利用できる。訪問日は数人の打ち合わせや単独での利用が目立った。こどもの本の部屋は絵本，児童文学，マンガなどを陳列している。

３階の常設展示室は，井上ひさし（初代館長），現代の仙台ゆかりの作家，歴史的な仙台ゆかりの作家のコーナーに分かれている。企画展示室で訪問日には，企画展「資料が伝える物語」として 2013 年以降の新しい収蔵資料の展示が行われていた。

なお，同館は台原森林公園の入り口に位置する自然環境に恵まれた場所に立地し，１階はエントランスとなっている。２階には喫茶室も営業している。

・職員について

館長（非常勤，文学者）１名，副館長１名のもとに，管理係４名，学芸室８名の計 14 名の職員で運営されている。管理係は施設管理や予算管理などを担当。学芸室は展示と普及活動（教育含む）などを担当。学芸室長は全体を統括する事務長を兼務している。また，同館の指定管理者は公益財団法人仙台市市民文化事業団であり，職員はここに所属している。

・展示の特徴について

毎年趣向を凝らした特別展・企画展を年数回開催するほか，常設展では，仙台や宮城にゆかりの文学の紹介を展示の特徴としている。また，仙台文学館ならではの展示として，寄贈を受けたものなど貴重な資料も随時公開している。さらに年間計画以外でも，その時々の話題や情勢に併せた展示も随時行っている。宮城ゆかりの戦争文学や，震災の後には，震災をテーマにした写真と文学のコラボレーションの企画展を行ったこともあった。人気のテレビドラマ「花子とアン」が放送された時期には，ドラマに登場した歌人・柳原白蓮の関連資料が寄贈されたこともあって，その常設展示室に特集コーナーを設けたところ，多くの来場者があった。

・来館者の動向について

震災後は，来館者数が落ち込んだが，現在は回復している。

企画展の内容によって，来館者数にかなりの変動がある。例えば夏休みの子ども企画で，かこさとしや馬場のぼるといった人気絵本作家をテーマにしたときには来館者が多かった。

開館から 20 年経って，当時から来ているリピーター層が薄くなっており（高齢化のため），新しい来館者の確保が課題である。若い人を集客するひとつの成功例として，今年秋に実施した「ガラスの仮面」の特別展がある。これは，40 年にわたり連載の続く演劇を題材にした人気マンガであり，劇中劇で著名な文学作品を取り入れたりしているなど複層的な作品であったことが奏功したようだ。今後の展開のヒントになっている。

２　教育活動について

・対象と活動の概要

一般向けとして，ゼミナールを全 10 講座（のべ 48 回）程度実施している。（文学鑑賞や実作，表現などがテーマ）また，館長が担当する「小池光短歌講座」も盛況である。

ゼミナールの実作講座受講生が，市民参加型のイベントである短歌・俳句・川柳の合同吟行会「ことばの祭典」や，朗読を発表する「仙台朗読祭」などに参加。ゼミナール受講が次に発展するという好ましいつながりが生じている。

一方，児童生徒向けとして，次のような活動を行っている。

「夏休みこども文学館えほんのひろば」は，絵本の原画展やおはなし会，絵本の部屋での閲覧などができる。特に，仙台市内の小学校のドリル帳で紹介される図書や感想文の課題図書を閲覧に供している。

ハンドブックとして『この本おすすめ～「こども文学館えほんのひろば」　お話会のみなさん＋仙台文学館』を編集し配布することで，お話し会や専門家，館職員おすすめの図書を紹介している。

他にも，小学校低学年などには難しい展示が多いので，ワークショップでしおり作りなどの遊びを取り入れて，文学館に親しみ，将来的に来館してもらえるような工夫をしている。

学校からの要望に応じた出前授業も行っている。数年前には近隣の小学校で岩手に修学旅行に行くことになった際に，ちょうど石川啄木の展示を行っていたので，文学館に来てもらい，後日に出前授業で宮沢賢治の話をした。

近隣の仙台市青年文化センター（日立システムズホール仙台）で開催された市内小中学生を対象としたオーケストラ鑑賞会の後に，徒歩で文学館に来てもらいワークショップを行ったことがある。

また，不登校の児童を対象にしたフリースクールの児童生徒にワークショップを実施したこともある。

その他，職場体験やインターンシップの受け入れも行っている。ＳＭＭＡ（仙台・宮城

ミュージアムアライアンス）の活動として，仙台市縄文の森広場や仙台市科学館と連携事業を行って，主に児童生徒の来館を図った。

・教育活動の課題について

児童生徒の場合，科学館や歴史民俗資料館などと異なり，授業内容に文学館と連携できるような単元がないので，学校側で授業の時間に来館を組み入れることがなかなかできない。

仙台市教育委員会では，所管の生涯学習施設を教員が訪問して施設活用等の研修会を行っているが，文学館の所管は文化観光局なので，これまでは研修会の対象施設ではなかったが，数年前から対象となるようになった。教員に館の役割と実際を学んでいただくことができるようになり，そこからのつながりも生まれた。

教員がなんらかの目的で，能動的に児童生徒を連れてくる場合は，事前に相談してもらうと，適切なメニューを紹介できる。そのような意味でも，文学館の存在を知らせることの大切さを認識している。

３　学習サークルや自主調査・研究活動グループの存在について

・グループの概要

館が開催する現代詩実作講座や朗読ワークショップの受講生が自主的にグループを作り，講座外で勉強会を行ったり，講師に指導を求めたりしている。数グループが活動しているようで，中には冊子を作成して作品集を出しているグループなどもある。館側として育成の取り組みなどは特に行っていないが，相談を受け情報提供をするなど，つながりを持っている。

４　館ボランティアについて

・「仙台文学館友の会」について

ボランティアグループとは一線を画するが，ユニークな組織として，「仙台文学館友の会」がある。これは，20 年前の仙台文学館開館にあたり，文学愛好者等の市民に呼びかけ結成した応援団的組織である（現在会員数は 160 名ほど）。運営も会員から選出された役員が行っている（事務局は館側で担当）。

友の会会員の中にボランティアの役割を担うサポーターもおり，吟行会「ことばの祭典」の手伝いや恒例の「100 万人の年賀状展」の共催を行っていただいている。

その他に，友の会主催で，他県の施設見学会，市内文学散策を年１回，読書会を隔月，会報発行を年３回など活発な活動を行っている。

課題としては，中心メンバーの高齢化があり，役員や会員の後継者の確保が望まれている。

５　現在の館の運営や事業の課題（予算，施設，集客，事業活動，評価等）について

限られた予算で企画展等を開催していかなければならないので苦心している。

開館 20 年を経て施設の老朽化による修繕も出てきているが，予算内で優先順位を考慮し実施しており，全てに対応することは難しい。

６　今後の博物館の役割・館の方向性について

来館者数の維持・拡大には，新たな世代に向けた呼び込みを行わなければならないと認識しているが，文学を取り巻く環境が変化していく中で，どのようにしたらいいかが課題。守るべきことと変えていくことを両立した運営が必要である。企画展の中に写真撮影コーナーをつくり来場者自らの発信を促すなど，SNS の情報発信等にも取り組み始めた。

７　その他

特になし。

８　所感

現在の利用者を３つの属性に分けてみると，まず文学・文芸に関心のある一般利用者である。企画展の他に，ゼミナールや実作講座などのイベントにもリピーターとして参加するなど，館の企画をキャッチアップしたなじみ客と言えよう。

次に，仙台文学館友の会会員のように，読書会や館外活動などに発展したヘビーユーザーである。仙台市内の文学好きが集まる場として，館はユニークな存在となっている。

もうひとつは，児童生徒である。恒例の夏休みイベントや校外学習で活用されている。

ともすれば文学館は，固くて難しいイメージを抱かれたり，どのような展示やイベントが実施されているのか想像しづらかったりしがちであるが，一定のしかも熱心なファン層を形成できたのは，企画参加者を次につなげたり広げたりする連続性や関連性など，職員のみなさんの努力と創意工夫の積み重ねに他ならない。

しかし，館に足を運んだことのない市民や観光客も相当に存在すると思われ，利用してもらうためには，もっと気軽に立ち寄れるようなしくみやアピールが必要だと思料する。

さいわいなことに館は森林公園を背景とする落ち着きのある環境で，カフェもあり，自由に利用できるデスクもある。地下鉄や幹線道路にも隣接し，交通も便利である。知的な香りのする思索の場，精神をリフレッシュする場，公園散策の休憩所など，文学に詳しくない人でも訪れやすい場所と位置づけて，初心者向けの（一見文学とは関係のない）イベントや展示をもっと大々的に行ってみても良いのではないかと感じた。

現代と過去の仙台ゆかりの作家や作品に自然に触れることができ，文学と文学館の魅力を再発見して，身近な存在として利用しやすくなるのではないだろうか。

○自然科学系博物館部会

1. 部会員

阿部清人委員（部会長），菊地崇良委員，佐々木啓子委員，佐藤智子委員，髙城みさ委員，高橋満委員長

2. 訪問先施設　（それぞれの調査結果は 43 ページ以降。）

・仙台市天文台　平成 30 年 12 月 13 日（木）
・スリーエム仙台市科学館　平成 30 年 12 月 18 日（火）
・震災遺構仙台市立荒浜小学校　平成 30 年 12 月 19 日（水）
・せんだい 3.11 メモリアル交流館　平成 30 年 12 月 20 日（木）

3. ヒアリング調査結果（総評）

（1）自然科学系博物館における学びの現状

各館とも，市民の多様な学びの場として機能している。学校教育においては，科学館の「科学館学習」が根付いている。市内全校の中学校第２学年が仙台市科学館（以下，科学館）で学習する事業は，70 年近く継続している。仙台市天文台（以下，天文台）でも小学校第４学年の 90%，第６学年の 75%が活用している。両館が理科教育に貢献している役割は大きい。

社会教育においては，科学館で自然観察会，ロボット教室，身近な科学教室などの各種教室や講座「大人の科学教室」がある。老若男女が参加して好評を得ており，大人の学びの場となっている。天文台では，天体カードゲーム企画，公開サイエンス講座，体験型科学実験教室を開催している。天文台の企画は，地元大学の協力を得ていることが特筆に値する。

市民ボランティアの関わりも注目される。科学館で「サイエンス・インタープリター」，天文台で「スタッフサポーター」や「天文ボランティア・うちゅうせん」が活動している。来館者に対するガイドやワークショップの運営のほか，自主的に勉強会をもってスキルアップをはかるなど，市民ボランティア自身の学びの場にもなっている。

来館者は両館とも，市内からが大半を占めている。一方，東日本大震災を伝承する「震災遺構仙台市立荒浜小学校（以下，荒浜小)」，「せんだい 3.11 メモリアル交流館（以下，交流館)」は，県外からの来館者が多い。来館者の属性や年齢層も多様で，教育旅行の「防災・震災プログラム」の仙台市の拠点として機能している。両館とも市民ボランティアの活動はないが，交流館では各種団体との「協力事業」としての取り組みがある。予算措置ないが，館としては会場提供と広報支援をしている。「協力」より「協働」に近いものもある。

（２）自然科学系博物館における学びの課題

天文台と荒浜小は，交通面での不便さが否めない。公共交通機関の便が少なく，自動車での来館が多くなる。

とりわけ，昨年度，荒浜小へ校外学習などで訪れた仙台市内の小学校は 11 校，中学校で５校にとどまっている。学校側で貸し切りバスの費用が捻出できない理由がある。学校現場での防災教育への活用が課題だ。

予算面で措置が追い付かず，展示物の更新が遅滞している事例もある。自然科学系の博物館の特徴として，日進月歩，進歩していく科学技術に対応していかなければならない。職員の工夫によって限られた予算で新たな展示物を工面している例もある。

また，博物館の専門職員である学芸員がおかれていても，施設によって専門性を活かした仕事にあてられる時間に差がある。日本における学芸員のステイタスの低さにも課題を感じているといった声も聞かれた。

この課題は，人員不足に起因するということも考えられる。例えば，科学館は学校教育との連携が根付いていることを前述したが，中学校で進んでいる一方，小学校の理科教育とはむしろ接点が少なくなっている。以前は小学校へのアウトリーチをしていたが，職員減によりできなくなった。小学校側からのニーズは高いと聞く。さらには，貸し出し用実験器具，資料室の活用などで，活用拡大の余地がある。

震災伝承の２館は，前例のない中での運営になっており，今後，それぞれの役割の明確化をしっかりと意識した展開が課題だ。

（３）学びの拠点としてのあり方や今後の可能性拡大のために考えられる施策・取組み等

自然科学系の博物館では，専門性のレベルをどの程度におくかに腐心する。来館者のニーズにあわせて，幅広い対応が求められる。天文台では，「お寺のようなにぎわいを生み出していきたい」との言葉が印象的だった。縁日ができて賑わい，入りたい人は奥のお寺に入って詳しく知る。科学や文化活動も，賑わいながら深まっていくような奥行きがある学びのイメージをもっているとのことだった。

市民ボランティア参加の拡大が学びの場を広げる。専門性の面での不安が，活動を消極的にしている例があるが，高度な専門性を持たなくても関与できるポジションの新設が必要だ。学都仙台として，大学生の関わりも期待される。天文台では，大学との共同企画の行事がある。科学館でも大学生に館を活用してもらいたいと考えており，またサイエンス・インタープリターとして，大学生が従来よりも気軽にボランティアに参加できるシステムを検討している。

震災伝承館の２館は，現時点で「所蔵品」がない。また防災の展示はしていない。東部沿岸部の被災，文化継承に特化する役割はゆるぎない。荒浜小は，建物（校舎）自体が津波の脅威を伝えている施設である。荒浜に特化した文化を伝えていくという趣旨がはっきりしており，震災遺構の存在意義を示している。県外からの来館者は全体の半数を超え，

全国的に注目を集めているといえる。今後，時間をかけてさらに荒浜地区の歴史，文化を掘り下げて展示物を充実させ，後世への伝承につながることが期待される。このまちの文化や暮らしを伝えていく側面性に加え，震災後に生まれた新たな文化を伝える施設となる可能性もあり得る。文化リテラシーを継承する施設として，新しい街になっていく過程も伝えてもらいたい。

交流館は，メモリアルシアターとして，身体を使った催しも企画し，ダンス，演劇，詩の朗読など多様な展開を図ることを考えている。モデルケースのない中でのスタートであり，まだ完成型ではないということだが，風化させることなく後世に 3.11 を伝えて行くことにフォーカスしており，さらなる進化が期待できる。今後，進化と共に市民ボランティアの関わりも予想されるので，体制づくりも準備しなければならない。

この２館の役割を永く維持するためにも，防災に特化した博物館の新設が望まれる。そこには天文台，科学館で仙台市がこれまで培ってきた，科学面からの防災の知見を十分に生かされることが求められる。

調査日：平成 30 年 12 月 13 日（木）
施設名：仙台市天文台
参加者：阿部清人委員，佐々木啓子委員，佐藤智子委員，髙城みさ委員
対応者：仙台市天文台　土佐台長，小野寺副台長兼運営マネジャー

1　館の体制と主な活動

《館の体制》

平成 20 年に青葉区西公園から現在地青葉区錦ケ丘に移転し，PFI 方式によって民間が運営・維持管理を担当するようになり 10 年目（30 年契約）。８社の民間企業が，特別目的会社である「仙台天文サービス」という会社をつくり，整備，維持管理，運営が行われている。仙台市からサービス料（運営費）が出ている。運営要求水準書に基づき運営している。

職員数は 44 名（平成 29 年度内訳：台長１名，セルフモタリングをする役割のヘルプデスク１名，副台長兼運営マネジャー１名，維持管理マネジャー１名，運営マネジャー代理・サブマネジャー・企画交流・総務が計 19 名，受付清掃などが計 21 名）。そのうち学芸員資格を有する者は８名。

《主な活動》

（１）マネジメント業務（２）活用促進業務（３）観測研究業務（４）教育支援業務《学校教育・生涯学習》（５）天文普及業務《展示・プラネタリウム・望遠鏡・大学・関連機関連携・天文情報提供（６）資料収集業務（７）メディア作成業務（８）広報業務（９）窓口業務（10）アンケート

上記以外に，独自事業も実施している。（プラネタリウム+朗読，音楽など）

来場者数　平成 29 年度計　144,052 人。

仙台市内の中学校は，全校が授業で天文台を訪れる。小学校は任意だが，４年生は 90%，６年生は 75%が訪れる。教育の現場も担っている。

2　教育活動について　展示以外のもの（一例）

・宇宙の広がりを実感する天体カードゲーム企画（東北大学天文学専攻の学生による）
・公開サイエンス講座（全４回）（東北大学理科学研究科とのコラボレーション企画）
・体験型科学実験教室（全５回）（宮城教育大学理科教育講座担当教員と天文台職員の共同企画）
・ロビーコンサート（宮城教育大学音楽教育専攻学生等による）
・仙台市野草園とのコラボレーションワークショップ
・広瀬図書館スタッフによるプラネタリウムでの読み聞かせ会
・講演会，近隣学校への講師派遣

３　学習サークルや自主調査・研究活動グループの存在について

（１）天文ボランティア　うちゅうせん（約 20 名）

（２）天文台同好会（約 20 名）

その他，市民によるイベント等の企画持ち込みも多い。申込書にて申請していただき，天文台スタッフと相談・調整をし，館のミッション（趣旨）と合致する場合は，予算も含めて企画を行ってもらう。

４　館ボランティアについて

４種のサポーター制度がある（ブレインサポーター，オーナーサポーター，ファンサポーター，スタッフサポーター）

・ファンサポーターはフリーペーパー「ソラリスト」の送付等を受けることができる（年会費 500 円）。

・スタッフサポーターは展示室での解説，移動天文台の手伝い等を行う。年間約 60 名が登録。半年をかけて養成講座を行う。年間 12 回の打ち合わせ・学習会のうち３回以上の出席と，１回以上の活動参加をサポーター継続の要件としている。毎年１割程度が退会，１割程度が新しく加わる。５年ごとに感謝状と記念品を送っている。

５　現在の館の運営や事業の課題（予算，施設，集客，事業活動，評価等）について

アンケート結果（1,731 名分）によると，来場者数の 46%が仙台市内から，24.8%が県外から。

秋田県，岩手県，山形県などから修学旅行で訪れる児童生徒も多い。

PFI，BOT という運営方式により，運営をハンドリングできる。館内にある機器などは，故障や破損等があれば速やかに修繕をすることが定められており，市民の財産という考え方からすれば，市民にとっては良い仕組みである。仙台市と民間企業が協力して，うまくいっているよい事例である。

《課題》

公共交通の不便さが挙げられる。72%の来館者が自動車で訪れている。また，館内や近隣に食事をとるところがない。

ボランティア（スタッフサポーター）については，高齢化はないが，展示室で解説を行う人材が増えない。天文学に対する知識が少ないと感じ，展示室に出て来館者と話すことに躊躇している様子である。

日本の学芸分野全体に関することであるが，日本における学芸員のステイタスの低さにも課題を感じている。

６　今後の博物館の役割・館の方向性について

お寺のようなにぎわいを生み出していきたい。縁日ができて賑わい，入りたい人は奥に，奥に入っていくお寺のように，科学や文化活動も，賑わいながら深まっていくような奥行きがある学びのイメージをもっている。

天文台のミッションは「宇宙を身近に」。小さい子どもから大人まで，見えないものに共感できるようにしていきたい。

７　その他

特になし。

８　所感

研究・プログラム開発もしていて，ハードだけではなくソフトに対する視点もあった。

宇宙を身近に感じるアプローチが多方面にわたり，楽しそうと思うきっかけがたくさんあった。

調査日　平成 30 年 12 月 18 日（火）
施設名　スリーエム仙台市科学館
参加者　阿部清人委員，佐々木啓子委員，髙城みさ委員
対応者　スリーエム仙台市科学館　西海枝事業係主任指導主事

＜施設の概要＞

仙台市直営。昭和 27 年にレジャーセンター内に「サイエンスルーム」を開設し，市内の中学生を対象にした実験指導である「科学館学習」を実施。このサイエンスルームを前身として，昭和 43 年に仙台市中心部に仙台市科学館が開館。科学館学習の他に，展示や生涯学習などの活動を通して多くの市民に親しまれてきた。平成２年に台原森林公園内に移転。新科学館は，科学館学習に新たに展示学習や実験選択制を導入したり，国内でいち早くコンピュータネットワークを構築するなど先進的な取り組みを続けてきた。

１　館の体制と主な活動

・体制は館長１名（市再任用職員），副館長兼事業係長１名，庶務係６名（行政職），事業係 14 名。事業係の中には教職員（指導主事）８名（兼務２名を含む），社会教育指導員５名，専門員１名がいる。学芸員資格保持者は３名。
・事業の柱は，学芸事業，学校教育事業，社会教育事業，連携事業，情報ネットワーク・広報事業の５つ。
・学芸事業は，「展示」で常設展，特別展，小企画展など。夏の企画展は事業係の指導主事が，前年の春から準備する。時間の多くを中学２年生の科学館学習対応にさいているが，夏休み中などに時間をつくっている。「調査研究」では蒲生干潟継続観察を実施。「科学相談」は，石，昆虫，鳥の鳴き声などに関する問い合わせが持ち込みや電話で毎年 200 件以上ある。職員が手分けをして調べて対応する。
・学校教育事業は，「科学館学習」，「仙台市児童・生徒理科作品展」，「教員の研修」，「学校，大学への支援」。市立中学校は，中学２年生になると全校「科学館学習」で来館する（年間約 9,000 人）。前半 90 分は「物理・化学・生物・地学」から１つ選び実験。後半 90 分で課題学習。昼食をとった後，３階の展示室を自由見学するという流れが主である。
・社会教育事業は，自然観察会，ロボット教室，身近な科学教室などの各種教室や講座。「大人の科学教室」は 10 月から年６回，定員は 20 名ずつで中学生以上を対象としている。講師は社会教育指導員が担う。老若男女が参加して好評を得ており，大人の学びの場となっている。
・連携事業はロボットフェスティバルなどの「共催事業」，「大学・学会・専門機関・NPO・企業との連携」，「博物館等との連携」。
・情報ネットワーク・広報事業は，ホームページ，コンテンツ，年報の作成など。

2　教育活動について

・前掲の学校事業と社会教育事業がある。

3　学習サークルや自主調査・研究活動グループの存在について

・市民参加は「サイエンス・インタープリター」。平成 11 年の館一部リニュアル時から開始。新たな人手が必要となったため科学館側が発案。春に募集し講座を受講して活動する。80 名ほどが活動しており，男性が８割を占める。

・「友の会」は 3,000 円ほどで常設展が年間を通して無料となり，実験教室に参加できる。館からのイベント情報をいち早く得ることができる。

4　館ボランティアについて

・「サイエンス・インタープリター」が自主クラブ「せかぼクラブ」に所属してから活動する。毎年６～７人新規で入る。退会する人もいるので，微増を続けている。毎日３～６人活動している。ワークショップ「チャレンジラボ」を毎日２回運営。シフトは社会教育指導員が担当。

・平成 31 年１月から新たに，ボランティアによる 20 分程のガイドツアーができるように準備を進めている。これまでは，ガイドツアーといっても個々の得意な分野の特定の部分しか解説していなかったが，台本を作ることで，誰でも一定の解説ができるようになる。名実ともに「ツアー」にする考え。

・「せかぼクラブ」は自主的に年に 10 回の研修会をしており，年に１度，館長らと情報交換会や懇親会も行っている。いなければ困る存在。

・ボランティアの課題は高齢化。体調悪化に備えて，家族の連絡先も把握している。

・大学生にもボランティアに参加してもらうため，大学にもアプローチしているが，年間を通しての入会は荷が重いのか，なかなか集まらない。そこで，単発のイベント時に参加できるシステムを今後計画中。

5　現在の館の運営や事業の課題（予算，施設，集客，事業活動，評価等）について

・来館者数は，平成 29 年度で約 17 万５千人。大半は，小学校低学年の親子連れが占めている。

・県外からの来館は修学旅行が多い。夏の企画展は仙台観光のついでにインターネットで調べて開催を知り，立ち寄る方が多い印象。

・新規の展示物は予算が付かず増えない。むしろ今年は，老朽化で２つ撤去した。

・起震装置「ぐらり君」は古くて東日本大震災の揺れを再現できないため，いずれ更新が必要。

・社会教育指導員で工作が得意な教員 OB がいるため，10 万円程度のロボット展示物を作ったりしている。

・科学実験装置の貸し出しをしているが，現場の教員は借用・返却の時間がとれず使えないでいる。中学校の授業で活用できると良いと感じている。
・「図書資料室」があり図鑑も豊富にそろえている。貸し出しも可だが，職員が常駐していないので，希望があるときだけ解錠。地下的な場所にあり，存在の認知度は低い。

6　今後の博物館の役割・館の方向性について
・以前は小学校へのアウトリーチをしていたが，職員減によりできなくなった。小学校側からのニーズは高いため，希望としては再開したい。
・大学生にも活用して欲しいし，力になってほしい。
・開館から 30 年たち，全体のリニュアルを計画している。５年後リニュアルオープンのイメージ。

7　その他
・広報は市政だよりと HP。講座などは抽選になるほど応募がある。広報誌作成やＳＮＳによる情報発信は職員の手が回らないこともあり実施していない。
・同じ市の施設で自然科学系である天文台との協働は，天文台に教員がいた頃（PFI 方式の導入前）はあったが，現在定期的なものはない。

8　所感
中学校の科学館学習を中心に，学校教育との連携が強い。市民ボランティアが熱心に活動に参画していて存在感を示している。科学館への市民参加の機会も，生涯学習活動の一環になっていると感じる。歴史系の博物館と違い，日々進化する科学を扱う博物館として，展示物の更新，追加は欠かせない。今後 AI（人工知能）が発達する中で，展示物の高度化や職員の専門性を高める課題への対応が求められる。

調査日　平成 30 年 12 月 19 日（水）
施設名　震災遺構仙台市立荒浜小学校
参加者　阿部清人委員，＜同席＞阿部哲也委員
対応者　震災遺構仙台市立荒浜小学校　嘱託職員　鈴木氏，高山氏，庄子氏，川村氏
※本報告書記載内容は，館内業務従事職員（ヒアリング調査対応者）へのヒアリング内容に基づく。

＜概要＞
・施設の概要
平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災において，児童や教職員，地域住民らおよそ 320 人が避難し，２階まで津波が押し寄せた荒浜小学校。被災した校舎のありのままの姿と被災直後の写真展示や当時の関係者のインタビューを編集した映像等により，来館者に津波の威力や脅威を実感してもらい，防災・減災の意識を高める場とするとともに，荒浜地区の歴史や文化を伝えていくことを目的に，本校舎を震災遺構として，平成 29 年４月 30 日に公開した。

１　館の体制と主な活動
・仙台市まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室が所管（市直営）。
・体制は嘱託職員５名で，役職はなく対等。市 OB（東日本大震災後，若林区役所で被災者支援を担当），NPO 活動経験者，同校卒業生，元荒浜住民。来館者が多いこともあり，今年度から１名増員した。
・防災環境都市・震災復興室とは月 1 回の定例会議を行っており，また担当者とは週１回程打合せをしている。
・職員は共通のマニュアルで事実を客観的に伝えることで同じガイドができるようにしている。来館者に質問されれば，自身の被災経験やその人の活動等を話すこともある。説得力がある。

２　教育活動について
・防災学習の面では教育的効果が大きいと感じている。実際に被災校舎を見てもらうと，想像以上に被害が大きいと驚かれる。現場に来て初めて伝わる。リアリティがある。
・3.11 メモリアル交流館（地下鉄東西線荒井駅）の企画展は工夫が巧みで感心させられるが，当該施設は現物による教訓を伝える場。荒浜地区に特化したことを伝える。

３　学習サークルや自主調査・研究活動グループの存在について
・拠点にして活動している団体はないが，市民団体との連携例として３月 11 日に風船を飛ばす HOPE FOR project 実行委員会があり，仙台市が協力している。

・元住民の意向を受け整備された「交流活動室」を，元住民らの交流の場にするイベントを企画したが，期待した程の反応はない。まだ足を運べない元住民が多いようだ。
・「交流活動室」は４階にあり，水場やトイレがないため，お茶のみなどの交流に適さないことなども活用につながらない１つの要因か。
・施設ができたことで，地元の人がいろいろな資料を持参してくれる。活用方法を検討していきたい。

4　館ボランティアについて
・ボランティアの募集はしておらず，申出も今のところない。外国人向けの通訳ボランティアの議論になったことはあるが実施していない。

5　現在の館の運営や事業の課題（予算，施設，集客，事業活動，評価等）について
・来館者数は平成 30 年７月で 10 万人に達した。12 月で約 13 万 6 千人。１日平均で 300 人弱。今年４～12 月で団体は 800 件ほど来館しており，１日に 10 件になることもある。
・来館者属性は，団体（行政，NPO，町内会等），教育関係（校外学習，修学旅行，大学ゼミ），企業（視察，研修））など様々。
・団体来館者の内訳はおおよそ県外からが６割，県内からが３割，海外からが１割。
・旅行代理店のツアーが多い（観光＋震災遺構）。
・町内会，民生委員，防災研究団体の来館や，岩手県・山形県の小学校が修学旅行で来館することもある。
・行政，議会関係者の来訪も少なくない。
・１団体の滞在時間は１時間程度。
・仙台市内の学校は比較的少ない。昨年度，校外学習などで訪れた市内の小学校は 11 校，中学校は５校に留まった。今年度も変わりない。仙台市営バスが今年度から貸し切りバスをやめたことも影響しているか。なお，路線バスは１時間に１本運行している。
・市内小学校が来訪しやすくなるよう，まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室と教育委員会で調整をすすめている。
・東北大学関係の学生，留学生，外国人が多い。英文のパンフレットも幾つかあるほか放映している 17 分の動画には英訳のテロップをつけてある。
・課題としては，英・中（簡・繁）・韓・タイ語の展示ガイド冊子の準備等も進めているが，外国人への対応をもう少ししっかりできるようにしたい。
・昼食をとる場がないので，団体来館の際などは他の施設との連携で対応することがある。

6　今後の博物館の役割・館の方向性について
・来年度から「住宅基礎遺構」（基礎だけのこっている場所）に説明表示を加えるなどして，荒浜小学校とセットで見てもらう準備も進めている。

＜以下，館内業務従事職員の所感＞

・将来，交流活動室に資料を増やして座って見てもらえるようにしたい。
・交流活動室の活用などは，当時，小中高生だった世代に何らかの動きを期待したい。
・集団移転跡地利活用が進む中で，震災前から唯一残る公共施設として，荒浜小学校の地域への役割（どのように寄与していくのか）を考えていきたい。
・このまちの文化や暮らしを伝えていく側面性に加え，震災後に生まれた新たな文化を伝える施設となる可能性もあり得るのではないかと考える。文化リテラシーを継承する施設として，新しい街になっていく過程も知ってもらいたい。

７　その他

仙台市防災・減災のまちづくり推進条例（平成 29 年３月 11 日施行）では，震災の記憶と記録，教訓を国内外と後世に伝承することになっており，現時点においてはその代表的な遺産・資産になっている。

８　所感

建物（校舎）自体が津波の脅威を伝えている施設である。荒浜に特化した文化を伝えていくという趣旨がはっきりしており，震災遺構の存在意義を示している。県外からの来館者は全体の半数を超え，全国的に注目を集めているといえる。今後，時間をかけてさらに荒浜地区の歴史，文化を掘り下げて展示物を充実させ，後世への伝承につながることが期待される。

調査日　平成 30 年 12 月 20 日（木）
施設名　せんだい 3.11 メモリアル交流館
参加者　阿部清人委員，佐々木啓子委員，髙城みさ委員，高橋満委員長
　　＜同席＞阿部哲也委員
対応者　せんだい 3.11 メモリアル交流館　八巻館長，石川交流係長
※本報告書記載内容は，館内業務に従事する施設運営委託先職員（ヒアリング調査対応者）へのヒアリング内容に基づく。

＜施設概要＞

平成 27 年 12 月の地下鉄東西線開通とともに１階部分が開館し，平成 28 年２月に上階部分と併せて全館が開館した。仙台市営地下鉄東西線の最東端，荒井駅のなかにある。東日本大震災を知り学ぶための場であるとともに，津波により大きな被害を受けた仙台市東部沿岸地域への玄関口でもある。記憶と経験を媒介に，コミュニケーションを通じて知恵と教訓を紡ぎ出し，未来へ，世界へとつないでいく拠点。１階に交流スペース，２階に展示室，スタジオ，屋上に屋上庭園がある。

１　館の体制と主な活動

・仙台市まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室が所管。仙台市市民文化事業団が管理運営を受託。
・開館初年度は市の直営だった。その方針を引き継ぎながら運営している。
・体制は館長，係長，主事２名，臨時職員３名の合計７名。うち係長が学芸員資格をもつが，学芸員として職務にあたっているわけではない。
・来館者の対応は主に臨時職員が行っている。

２　教育活動について

・企画展は年３回，１クール４ケ月。係長，主事２名が１つずつ分担している。準備には４～５ケ月を要する。館の収蔵品はなく，企画展はテーマの設定からはじまる。
・企画展のたびに訪れるリピーター，常連者が増えている。
・県外の大学に進学した学生が，震災のことを学び直しにきたり，逆に新たに県外から仙台の大学に進学した学生も来館する。大学の教員が学生を連れてくる姿も多い。
・震災そのものを伝えるのではなく，震災で何に気づいたか。震災以後，新しくなった東部沿岸部だが，変わらず残っているものもある。震災の前後を企画展で伝えている。
・１階にて震災前と震災後の同じ場所の写真を比較する８分間の映像を流しており，好評。

３　学習サークルや自主調査・研究活動グループの存在について

・市民との関わりは，「協力事業」として取組んでおり，平成 30 年度は 28 件の実績がある。

そのうち６～７事業は，毎年継続。予算措置ないが，館としては会場提供と広報支援をしている。「協力」より「協働」に近いものもある。
・青葉区中央市民センターの講座では相互の施設を使い，企画支援もした。
・拠点にして活動している団体はない。
・市民団体からの企画持込は，この３年間で増加傾向にある。

4　館ボランティアについて
・ボランティア活動はない。ボランティア活動の申し出があれば「協力事業」として受け入れることが想定されるが，その場合は活動内容について確認し検討する必要がある。
・臨時職員が個人的に「語り継ぎの会」の活動をしているが，来館者の要請があればそちらの立場として対応することもある。
・他県の職員がグループワークをしたいという希望があり，「語り継ぎの会」に協力をいただいたこともある。
・館がボランティアを受け入れるまでに成熟していない。来館者対応で精いっぱいの現状。
・語り部の時間を定期的に企画する可能性はある。

5　現在の館の運営や事業の課題（予算，施設，集客，事業活動，評価等）について
・来館者は平成 28 年度：約５万５千人，29 年度：約６万人，30 年４月で延約 15 万人。
・修学旅行の生徒たちは自由行動で地下鉄に乗ってくる。
・団体はバスでくる。駐車場はないが不便は感じない。町内会，婦人防火クラブ，消防団，PTA，社員研修，旅行会社のツアーなど多彩。県外からの来館者が多いと感じている。出張のついでに来る方や，目的なく地下鉄に乗って施設を見つけて入る来館者もいる。
・展示やイベント等にかかる事業費は約 9,000 千円。１つの企画展に対し 2,000～3,000 千円。
・常設の展示物は発注側の市で企画。特に不具合，不満はない。
・入口に設置されている水槽では，宮城教育大学が震災発生前に採集していた若林区井土地域のメダカを飼育している。津波の被害に遭った井土地域のメダカを繁殖させてふるさとに還すための取り組み。震災後にふるさとで生活できなくなったメダカは，ふるさとに帰れない東部沿岸地域の人々にも重なる。
・震災遺構仙台市立荒浜小学校は「リアル」。当該館は，ドキュメントとして東部沿岸部を広く伝える。
・防災の展示はしていない。現在計画が進められている，中心部拠点のあり方が明確になれば当該館は東部沿岸部により特化した取組ができる可能性がある。
・被災の刺激的な展示をしても，「わかった気になる」だけになりかねない。
・来館者が被災体験を話し始めたら聞く側に徹する。「ありがとう」と言って帰る姿がある。

6　今後の博物館の役割・館の方向性について

・歳月を経て震災の記憶が薄れていくなか，第三世代にどうバトンを渡していくかが課題。平成 25 年度から平成 28 年度まで「震災メモリアル・市民協働プロジェクト」として実施された，震災の記憶と経験を市民一人ひとりが伝える視点を持って後世に継承していくための場や仕組みをつくる事業「伝える学校」の後継も検討している。

・メモリアルシアターとして，身体を使った催しも企画したい。ダンス，演劇，詩の朗読など多様な展開を図りたい。

7　その他

特になし。

8　所感

館内には，来館された方に地域の魅力や想い出を付箋に書いて地図に貼ってもらう「仙台沿岸イラストマップ」や，短冊に発災時の状況や復興への願いを書いた「わたしたちの 3.11」等の参加型展示物があり，共感した。来館者の中には，未だに震災の悲しみから抜け出せない方も多い事から，刺激的な展示は控えるなど，来館者への配慮も見られた。モデルケースのない中でのスタートであり，まだ完成型ではないということだが，風化させることなく後世に 3.11 を伝えて行くことにフォーカスしており，さらなる進化が期待できる。

Ⅱ　仙台市博物館来館者アンケート

○調査概要

１．**実施場所**：仙台市博物館

２．**実施期間**：【第一回】平成 31 年１月５日（土）～１月９日（水）　10 時～16 時
・７日（月）を除く　平日２日、土日２日（計４日）
・常設展示期間
【第二回】平成 31 年４月 11 日（木）～４月 14 日（日）　11 時～16 時
・平日２日、土日２日（計４日）
・常設展示期間

３．**調査方法**：アンケート調査票による回答収集
・自記式（Ａ３両面程度）
・展示室出口にて調査員から協力依頼

４．**調査対象**：展示を見終わった概ね中学生以上の来館者
（外国人については通訳付き又は日本語が理解できる方のみ）

５．**調査票回収数**：【第一回】115 件
【第二回】211 件

○単純集計結果

【　第一回　】

1.　あなたの性別をお聞きします。あてはまるもの1つに ☑をつけてください。(単位:人(%)　以下同様)

□男性 76(66.1)　□女性 38(33.0)　□無回答 1(0.9)

2.　あなたの年齢をお聞きします。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

～15 歳　3(2.6)	30～39 歳　17(14.8)	60～69 歳　11(9.6)
16～19 歳　5(4.3)	40～49 歳　26(22.6)	70～79 歳　13(11.3)
20～29 歳　20(17.4)	50～59 歳　17(14.8)	80 歳以上　3(2.6)

3.　あなたのお住いをお聞きします。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

＜仙台市内の方＞
□青葉区内　22(19.1)
□宮城野区内　2(1.7)
□若林区内　4(3.5)
□太白区内　3(2.6)
□泉区内　13(11.3)

＜仙台市外にお住いの方＞
□宮城県内（仙台市内除く）　4(3.5)
□東北地方（宮城県内除く）　21(18.3)
□東京　13(11.3)
□関東　22(19.1)
□その他　11(8.6)

4.　あなたには、1 日の中で自由時間（仕事、家事、育児、授業、睡眠、食事などに使った以外の時間）がどのくらいありますか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

	ほとんどない	1時間ぐらい	2時間ぐらい	3時間ぐらい	4時間ぐらい	5時間以上	無回答
平日	13(11.3)	15(13.0)	30(26.1)	26(22.6)	14(12.2)	14(12.2)	3(2.6)
土曜日	3(2.6)	7(6.1)	23(20.0)	17(14.8)	17(14.8)	38(33.0)	10(8.7)
日曜・祝日	2(1.7)	7(6.1)	16(13.9)	16(13.9)	17(14.8)	48(41.7)	9(7.8)

5.　あなたがよく訪れる（概ね年数回程度）、仙台市内の博物館系施設はありますか。あてはまるものすべてに ☑ をつけてください。

□仙台市博物館　29(25.2)
□仙台市科学館　12(10.4)
□仙台市天文台　8(7.0)
□仙台市歴史民俗資料館　9(7.8)
□地底の森ミュージアム　9(7.8)
□縄文の森広場　2(1.7)
□仙台文学館　3(2.6)
□その他　3(2.6)

仙台市博物館の利用状況についてうかがいます。

6.　直近 1 年間で、どの程度仙台市博物館に来ましたか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□はじめて　71(61.7)
□2 回目　14(12.2)
□3～5 回目　23(20.0)
□6～10 回目　4(3.5)
□11 回以上　1(0.9)
□無回答　2(1.7)

7.　今日、あなたは誰と仙台市博物館に来ましたか。あてはまるものすべてに ☑ をつけてください。

□一人で　26(22.6)
□家族と　49(42.6)
□恋人・パートナーと　12(10.4)
□友人と　12(10.4)
□学校・団体で　5(4.3)
□仕事の同僚と　1(0.9)
□その他

8.　今日、仙台市博物館に来た理由は何ですか。もっともあてはまるもの１つに☑ をつけてください。

□歴史に関心があるため　37(32.2)
□常設展・企画展を見るため　16(13.9)
□子どもに見学させるため　10(8.7)
□観光の一環として　21(18.3)
□学校・団体の行事で　3(2.6)
□空き時間を有効につかうため　9(7.8)
□その他　5(4.3)
□無回答　14(12.2)

9.　今日、仙台市博物館に来たきっかけは何ですか。あてはまるものすべてに ☑ をつけてください。

□家族・友人からの紹介　20(17.4)
□市の広報　16(13.9)
□新聞　2(1.7)
□チラシ・ポスター　7(6.1)
□テレビ・ラジオ　1(0.9)
□ＳＮＳ（face book など）　5(4.3)
□観光ガイドブックなど　37(32.2)
□学校の授業や先生からの紹介　4(3.5)
□その他　23(20.0)

10. 今日、あなたはどのような交通手段で仙台市博物館にきましたか。あてはまるものすべてに☑ をつけてください。

□徒歩で　10(8.7)
□自家用車で　46(40.0)
□バスで　24(20.9)
□地下鉄で　21(18.3)
□その他　5(4.3)

仙台市博物館についての感想等についてうかがいます。

11. 今日の仙台市博物館での見学時間はどのくらいですか。あてはまるもの１つに ☑ をつけてください。

□30 分未満　5(4.3)
□31～60 分　22(19.1)
□60 分～90 分　54(47.0)
□91 分～120 分 12(10.4)
□121 分以上　7(6.1)
□無回答　15(13.0)

12. あなたが興味のある時代・分野・仙台ゆかりの人物について、あてはまるものすべてに☑ をつけてください。

（1）時代

□古代（旧石器～平安）25(21.7)
□中世（鎌倉～安土桃山）46(40.0)
□近世（江戸）　48(41.7)
□幕末・維新　48(41.7)
□近代（明治～戦前）　25(21.7)
□現代（戦後）　21(18.3)

（2）分野

□絵画や書　51(44.3)
□刀剣等の武器　36(31.3)
□金工・木漆工　12(10.4)
□歴史資料　54(47.0)
□浮世絵　54(47.0)
□甲冑等の武具　25(21.7)
□服飾（着物等）38(33.0)
□考古資料　18(15.7)
□彫刻（仏像等）　25(21.7)
□陶磁器　19(16.5)
□人形等民芸　15(13.0)
□その他　8(7.0)

（3）仙台ゆかりの人物

□伊達政宗　83(72.2)
□支倉常長　42(36.5)
□林子平　10(8.7)
□その他　3(2.6)

13. 仙台市博物館の展示や条件に満足しましたか。それぞれあてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
常設展	72(62.6)	23(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	17(14.8)
特別展・企画展	48(41.7)	29(25.2)	0(0.0)	0(0.0)	23(20.0)
カフェ・食堂	16(13.9)	10(8.7)	3(2.6)	0(0.0)	29(25.2)
ショップ	22(19.1)	24(20.9)	2(1.7)	0(0.0)	30(26.0)
休憩スペース	37(32.2)	27(23.5)	1(0.9)	0(0.0)	26(22.6)
パーキング	31(27.0)	11(9.6)	2(1.7)	1(0.9)	31(27.0)
スタッフの対応	55(47.8)	21(18.3)	2(1.7)	1(0.9)	27(23.5)
入館料	60(52.2)	22(19.1)	3(2.6)	0(0.0)	26(22.6)
館の広報	32(27.8)	24(20.9)	3(2.6)	1(0.9)	33(28.7)

満足度の理由等について、ご自由にご記入ください。

14. 今日の来館で、仙台市博物館ボランティアから解説を受けましたか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□受けた　42(36.5)　　□受けていない　58(50.4)　　□無回答　15(13.0)

15. 14で、「受けた」とお答えの方のみ、ご回答ください。

仙台市博物館のボランティアはいかがでしたか。それぞれあてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

	あてはまる	やや あてはまる	あまり はまらない	あてはまらない	非該当	無回答
対応が丁寧で親切	35(60.3)	5(8.6)			57	18 (31.0)
解説わかりやすい	26(44.7)	12(20.7)	1(1.7)		57	19(32.8)
専門性が高い	18(31.0)	18(31.0)	1(1.7)	1(1.7)	57	20(34.5)

16. 14で、「受けた」とお答えの方のみ、ご回答ください。
あなたは次回もボランティアに解説を頼みたいと思いますか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□ぜひ頼みたい　14(24.1)　□できれば　22(37.9)　□あまり　4(5.2)　□頼まない　3(5.2)
□非該当　56()　　□無回答　16(27.6)

17. 今回の訪問で、仙台市博物館はどのようなところだと感じましたか。それぞれあてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	無回答
楽しいところ	47(40.9)	47(40.9)	9(7.8)	1(0.9)	11(9.6)
知識を得られるところ	83(72.2)	18(15.7)	2(1.7)	1(0.9)	11(9.6)
興味や関心を呼び起こすところ	70(60.9)	27(23.5)	5(4.7)	2(1.7)	11(9.6)
かた苦しいところ	5(4.3)	19(16.5)	55(47.8)	21(18.3)	15(13.0)
声を出さず静かにするところ	29(25.2)	38(33.0)	24(20.9)	8(7.0)	16(13.9)
たいくつなところ	4(3.5)	11(9.6)	36(31.3)	49(42.6)	15(13.0)

18. あなたは今後も仙台市博物館に来たいと思いますか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□ぜひ来たい　49(42.6)　□できれば　54(47.0)　□あまり来たくない　2(1.7)
□来たくない　2(1.7)　□無回答　8(7.0)

19. あなたは今後仙台市博物館を人に勧めたいと思いますか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□そう思う　46(40.0)　□どちらかというとそう思う　49(42.6)
□どちらかというとそう思わない　8(7.0)　□そう思わない　2(1.7)　□無回答　10(8.7)

20. 今日あなたは、仙台市博物館以外にどこか訪問しましたか、または、訪問する予定ですか。あてはまるものすべてに ☑ をつけてください。

□宮城県美術館　6(5.2)
□仙台城跡　41(35.7)
□瑞鳳殿　32(27.8)
□国際センター　6(5.2)
□東北大学（萩ホール含む）2(1.7)
□その他博物館　2(1.7)
□仙台市中心街　29(25.2)
□その他　9(7.8)

21. その他ご意見や、もっと多くの皆様にご来館いただくためのアイディア・アドバイスをお聞かせください。

【　第二回　】

1.　あなたの性別をお聞きします。あてはまるもの1つに ☑をつけてください。

□男性 114(54.0)　□女性 94(44.5)　□無回答 3(1.4)

2.　あなたの年齢をお聞きします。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

～15 歳　15(7.1)
16～19 歳　8(3.8)
20～29 歳　23(10.8)
30～39 歳　37(17.5)
40～49 歳　29(13.7)
50～59 歳　34(16.0)
60～69 歳　43(20.3)
70～79 歳　17(8.0)
80 歳以上　5(2.4)

3.　あなたのお住いをお聞きします。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

＜仙台市内の方＞
□青葉区内　18(8.5)
□宮城野区内　9(4.2)
□若林区内　9(4.2)
□太白区内　12(5.7)
□泉区内　8(3.8)

＜仙台市外にお住いの方＞
□宮城県内（仙台市内除く）　12(5.7)
□東北地方（宮城県内除く）　31(14.7)
□東京　19(9.0)
□関東　41(19.4)
□その他　52(24.6)

4.　あなたには、１日の中で自由時間（仕事、家事、育児、授業、睡眠、食事などに使った以外の時間）がどのくらいありますか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

	ほとんどない	１時間ぐらい	２時間ぐらい	３時間ぐらい	４時間ぐらい	５時間以上	無回答
平日	28(13.2)	25(11.8)	42(19.8)	40(18.9)	23(10.8)	50(23.6)	3(1.4)
土曜日	11(5.2)	13(6.1)	18(8.5)	23(10.8)	26(12.3)	100(47.2)	20(9.4)
日曜・祝日	8(3.8)	10(4.7)	13(6.1)	16(7.5)	34(16.0)	111(52.4)	19(79.0)

5.　あなたがよく訪れる（概ね年数回程度）、仙台市内の博物館系施設はありますか。あてはまるものすべてに ☑ をつけてください。

□仙台市博物館　40(18.9)
□仙台市科学館　9(4.2)
□仙台市天文台　14(6.6)
□仙台市歴史民俗資料館　9(4.2)
□地底の森ミュージアム　14(6.6)
□縄文の森広場　4(1.9)
□仙台文学館　6(2.8)
□その他　19(9.0)

仙台市博物館の利用状況についてうかがいます。

6.　直近１年間で、どの程度仙台市博物館に来ましたか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□はじめて　162(76.4)
□2 回目　19(9.0)
□3～5 回目　21(9.9)
□6～10 回目　5(2.4)
□11 回以上　0(0.0)
□無回答　4(1.9)

7.　今日、あなたは誰と仙台市博物館に来ましたか。あてはまるものすべてに ☑ をつけてください。

□一人で　61(28.8)
□家族と　81(38.2)
□恋人・パートナーと　28(13.2)
□友人と　21(9.9)
□学校・団体で　4(1.9)
□仕事の同僚と　6(2.8)
□その他　4(1.9)

8.　今日、仙台市博物館に来た理由は何ですか。もっともあてはまるもの１つに☑ をつけてください。

□歴史に関心があるため　86(40.6)
□常設展・企画展を見るため　26(12.3)
□子どもに見学させるため　5(2.4)
□観光の一環として　51(24.1)
□学校・団体の行事で　2(0.9)
□空き時間を有効につかうため　23(710.8)
□その他　6(2.8)
□無回答　12(5.7)

9.　今日、仙台市博物館に来たきっかけは何ですか。あてはまるものすべてに ☑ をつけてください。

□家族・友人からの紹介　39(18.4)
□市の広報　11(5.2)
□新聞　5(2.4)
□チラシ・ポスター　8(3.8)
□テレビ・ラジオ　9(4.2)
□ＳＮＳ（face book など）　11(5.2)
□観光ガイドブックなど　82(38.7)
□学校の授業や先生からの紹介　4(3.5)
□その他　23(20.0)

10. 今日、あなたはどのような交通手段で仙台市博物館にきましたか。あてはまるものすべてに☑ をつけてください。

□徒歩で　29(13.7)
□自家用車で　55(25.9)
□バスで　68(32.1)
□地下鉄で　43(20.3)
□その他　22(10.4)

仙台市博物館についての感想等についてうかがいます。

11. 今日の仙台市博物館での見学時間はどのくらいですか。あてはまるもの１つに ☑ をつけてください。

□30 分未満　24(11.3)
□31～60 分　60(28.3)
□60 分～90 分　97(45.8)
□91 分～120 分 13(6.1)
□121 分以上　5(2.4)
□無回答　12(5.7)

12. あなたが興味のある時代・分野・仙台ゆかりの人物について、あてはまるものすべてに☑ をつけてください。

（1）時代

□古代（旧石器～平安）72(34.0)
□中世（鎌倉～安土桃山）87(41.0)
□近世（江戸）　35(16.5)
□幕末・維新　98(46.2)
□近代（明治～戦前）　51(24.1)
□現代（戦後）　76(35.8)

（2）分野

□絵画や書　43(20.3)
□刀剣等の武器　40(18.9)
□金工・木漆工　46(21.7)
□歴史資料　35(16.5)
□浮世絵　20(9.4)
□甲冑等の武具　5(22.4)
□服飾（着物等）167(78.8)
□考古資料　57(26.9)
□彫刻（仏像等）　27(12.7)
□陶磁器　10(4.7)
□人形等民芸　111(152.4)
□その他　55(25.9)

（3）仙台ゆかりの人物

□伊達政宗　167(78.8)
□支倉常長　57(26.9)
□林子平　27(12.7)
□その他　10(4.7)

13. 仙台市博物館の展示や条件に満足しましたか。それぞれあてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
常設展	111(52.4)	77(36.3)	5(2.4)	0(0.0)	18(8.5)
特別展・企画展	55(25.9)	55(25.9)	7(3.3)	1(0.5)	41(19.3)
カフェ・食堂	16(7.5)	21(9.9)	4(1.9)	0(0.0)	54(25.5)
ショップ	25(11.8)	26(12.3)	4(1.9)	0(0.0)	61(28.8)
休憩スペース	61(28.8)	45(21.2)	2(0.9)	0(0.0)	53(25.0)
パーキング	32(15.1)	27(12.7)	7(3.3)	0(0.0)	54(25.5)
スタッフの対応	96(45.3)	59(27.8)	7(3.3)	0(0.0)	37(17.5)
入館料	101(47.6)	62(29.2)	6(2.8)	2(0.9)	32(15.1)
館の広報	48(22.6)	41(19.3)	6(2.8)	1(0.5)	51(24.1)

満足度の理由等について、ご自由にご記入ください。

14. 今日の来館で、仙台市博物館ボランティアから解説を受けましたか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□受けた　68(32.1)　　□受けていない　128(60.4)　　□無回答　15(7.1)

15. 14で、「受けた」とお答えの方のみ、ご回答ください。

仙台市博物館のボランティアはいかがでしたか。それぞれあてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

	あてはまる	やや あてはまる	あまり はまらない	あてはまらない	無回答
対応が丁寧で親切	57(26.9)	14(6.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	15(7.1)
解説わかりやすい	52(24.5)	16(7.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	18(8.5)
専門性が高い	45(21.2)	18(8.5)	4(1.9)	2(0.9)	17(8.0)

16. 14で、「受けた」とお答えの方のみ、ご回答ください。
あなたは次回もボランティアに解説を頼みたいと思いますか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□ぜひ頼みたい　24(27.9)　□できれば　37(43.0)　□あまり　3(3.5)　□頼まない　5(5.8)
□無回答　17(19.8)

17. 今回の訪問で、仙台市博物館はどのようなところだと感じましたか。それぞれあてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	無回答
楽しいところ	57(26.9)	90(42.5)	30(14.2)	4(1.9)	30(14.2)
知識を得られるところ	148(69.8)	52(24.5)	0(0.0)	0(0.0)	11(5.2)
興味や関心を呼び起こすところ	106(50.0)	77(36.3)	9(4.2)	0(0.0)	19(9.0)
かた苦しいところ	12(5.7)	43(20.3)	77(36.3)	48(22.6)	31(14.6)
声を出さず静かにするところ	73(34.4)	77(36.3)	26(12.3)	5(2.4)	30(14.2)
たいくつなところ	4(1.9)	23(10.8)	74(34.9)	79(37.3)	31(14.6)

18. あなたは今後も仙台市博物館に来たいと思いますか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□ぜひ来たい　49(23.1)　□できれば　144(67.9)　□あまり来たくない　8(3.8)
□来たくない　2(0.9)　□無回答　8(3.8)

19. あなたは今後仙台市博物館を人に勧めたいと思いますか。あてはまるもの1つに ☑ をつけてください。

□そう思う　69(32.5)　□どちらかというとそう思う　106(50.0)
□どちらかというとそう思わない　23(10.8)　□そう思わない　5(2.40)　□無回答　8(3.8)

20. 今日あなたは、仙台市博物館以外にどこか訪問しましたか、または、訪問する予定ですか。あてはまるものすべてに ☑ をつけてください。

□宮城県美術館　23(10.8)
□仙台城跡　113(53.3)
□瑞鳳殿　84(39.6)
□国際センター　11(5.2)
□東北大学（萩ホール含む）14(6.6)
□その他博物館　7(3.3)
□仙台市中心街　62(29.2)
□その他　10(4.7)

21. その他ご意見や、もっと多くの皆様にご来館いただくためのアイディア・アドバイスをお聞かせください。

Ⅲ　参考資料

○　仙台市社会教育委員名簿

（任期：平成 29 年 11 月 1 日から令和元年 10 月 31 日まで）

氏　　名	所属・役職名	役職等
阿部　清人	株式会社ＭＣラボ　代表取締役	
阿部　哲也	株式会社嶺岸工務店新寺営業所所長	
小形　美樹	仙台青葉学院短期大学教授	副委員長
男澤　亨	株式会社あるく代表取締役社長	
菊地　崇良	仙台市議会議員	
齊藤　康則	東北学院大学准教授	
佐々木　啓子	西公園プレーパークの会プレーリーダー	
佐藤　智子	東北大学准教授	
庄司　弘美	仙台市社会学級研究会顧問	
髙城　みさ	仙台市ＰＴＡ協議会副会長	
高橋　満	東北大学大学院教授	委員長
高山　典子	仙台市立北中山小学校校長	
渡辺　祥子	フリーアナウンサー・朗読家	

敬称略・五十音順

所属等は委員在任時最終のもの

○ 仙台市社会教育委員の会議　審議の経過

	開催日	協議内容
第1回	平成29年11月22日	○ 委員長、副委員長の選出について ○ 会議の運営について ○ 会議の日程について
第2回	平成30年 2月 6日	○ 今期会議のテーマについて
第3回	平成30年 4月17日	○ 平成30年度社会教育関係予算について ○ 平成30年度社会教育団体に対する補助金について ○ 博物館の概要について
第4回	平成30年 6月 5日	○ 今期会議のテーマについて ○ 今後の進め方について
第5回	平成30年 8月 7日	○ 調査方法の検討
第6回	平成30年11月13日	○ 調査方法の検討
事例調査	平成30年11月～12月	○ 人文科学系博物館部会 平成30年11月28日　仙台市博物館 平成30年12月 6日　仙台市歴史民俗資料館 宮城県美術館 平成30年12月20日　仙台文学館 ○ 自然科学系博物館部会 平成30年12月13日　仙台市天文台 平成30年12月18日　仙台市科学館 平成30年12月19日　震災遺構仙台市立荒浜小学校 平成30年12月20日　せんだい3.11メモリアル交流館
第7回	平成30年12月25日	○ 調査結果 中間報告
第8回	平成31年 2月5日	○ 調査結果 最終報告 ○ 提言の骨子協議
第9回	平成31年 4月16日	○ 平成31年度社会教育関係予算について ○ 平成31年度社会教育団体に対する補助金について ○ 提言の骨子協議 ○ 提言書素案の協議
第10回	令和元年 6月 4日	○ 提言書素案の協議
第11回	令和元年 8月 6日	○ 提言書最終案の協議
ワーキング グループ	令和元年 9月 9日	○ 提言書最終案の協議
第12回	令和元年10月15日	○ 提言書最終協議

発　行
仙台市教育委員会生涯学習課
〒980-0011　仙台市青葉区上杉一丁目5番12号
上杉分庁舎10階
TEL 022-214-8886　　FAX 022-268-4822
本文用紙は古紙再生紙を使用しています。